

はじめに

令和4年度の上伊那保健体育研究会の実践や研究の成果、歩みが令和4年度の「高嶺」としてまとめられ、ここに発刊されました。

振り返れば、本年度も昨年度、一昨年度から引き続いて、ウィズコロナからスタートした4月でした。学校行事や研修等は、これまでと比べると行えることが増え、コロナ禍の中にあっても、「学びを止めない」という先生方の強い想いが感じられる1年間でした。このような想いの中、先生方に支えながら、これまで歩みを進めることができました。

7月29日(金)に予定していた上伊那保健体育研究会夏期研修会は、残念ながらコロナ禍の煽りを受け、中止をさせていただきました。例年よりも多くの参加希望者があったにもかかわらず、先生方の研修の機会を奪ってしまったことを反省しております。また、教育課程授業校の西箕輪小学校、学習指導研究会会場校の宮田小学校、飯島中学校、そして、関わっていただいた研究部の皆様には、授業づくりを進めるに当たって、多大なご苦勞をおかけしました。ありがとうございました。

11月8日(火)には、学習指導研究会を予定通りに開催することができました。授業を公開していただいた、宮田小学校の佐藤瑠郁先生と飯島中学校の高原大誠先生におかれましては、児童・生徒が運動に向かい合い、生き生きと活動している様子を拝見させていただくことができ、誠に感謝申し上げます。また、信州大学教育学部教授 岩田 靖先生にも、終日のご指導とご講演をいただきました。研究内容や成果、岩田先生の講演については、この高嶺に記載されています。今後の参考になりますので、お読みいただきたいと思います。

1月19日(木)には、美篤小学校を会場として実技講習会を開くことができました。ここ2年間中止となっていましたので、開催できたことをうれしく思います。講師を務められた、新山小学校の大内順平先生、中沢小学校の笹岡理沙先生には、県の伝達講習会で学んだ内容を、実技を通して、楽しく教えていただきました。ありがとうございました。

今後も「こどもたち中心の体育学習」を願って、これからも日々奮闘し、できることを最大限に生かせる取組を進めながら、ともに学び続ける体育教師を目指していきましょう。

結びになりますが、本研究会をお支えいただいた上伊那教育会、信州大学教育学部教授岩田靖先生、そして、上伊那保健体育研究会の役員をはじめ会員の皆さまに心より感謝しお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

令和5年3月

上伊那保健体育研究会 会長 浜田 康敬
(伊那市立手良小学校)

「高嶺」もくじ

内容	
I	はじめに
II	保健体育研究会総会
1	事業計画
2	会員名簿
3	役員名簿
III	夏季保健体育学習指導研究会（今年度未実施の為、1, 2のみ）
1	概要
2	日程・係分担及び細案
3	第一分科会（小学校） 研究会まとめ
4	第二分科会（中学校） 研究会まとめ
5	講演会記録（信州大学教育学部 岩田靖先生）
IV	学習指導研究会
1	概要
2	日程・係分担及び細案
3	西箕輪小学校 研究のまとめ (1) 指導案 (2) 授業者振り返り (3) チーム記録・分析 (4) 研究会記録
4	西箕輪中学校 研究のまとめ (1) 指導案 (2) 授業者振り返り (3) チーム記録・分析 (4) 研究会記録
5	講演会記録（信州大学教育学部 岩田靖先生）
6	研究全体のまとめ (1) 教材づくりについて (2) 授業設計について (3) 教授行為について (4) 「自ら運動の楽しみ方を創り出していく」具体的な姿について (5) 研究のまとめ
V	教材（ゴールイメージ：動画）
VI	伝達講習資料
1	幼児の運動遊び資料
2	陸上運動資料
3	水泳運動資料

令和4年度 上伊那保健体育研究会事業計画

上伊那保健体育研究会

- 1 総会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5月18日(水) 於；オンライン
 - 「上伊那保健体育研究会規約」の確認
 - 令和4年度役員選出、役員組織の承認
 - 令和4年度事業計画案および予算案の承認
 - 令和4年度研究テーマおよび研究の方向

- 2 第1回役員会・・・・・・・・・・・・・・・・ 5月18日(水) 於；オンライン
 - 今年度の本研究会の活動の方向（実技講習会の企画等を含む）および各ブロックの活動について
 - 夏期研修会及び学指研の概要について

- 3 第2回役員会・・・・・・・・・・・・・・・・ 6月14日(火) 於；宮田中学校⇒オンライン
 - 総会議案書作成、オンライン開催までの反省および申し送り事項の確認
 - 夏期研修会の要項および詳細についての検討

- 4 夏期研修会・・・・・・・・・・・・・・・・ 7月29日(金) 於；南箕輪小中学校⇒中止
 - 指導案づくりと教材研究（※午前開催）

- 5 第3回役員会・・・・・・・・・・・・・・・・ 9月 6日(火) 於；宮田中学校⇒オンライン
 - 夏期研研修会の反省
 - 学習指導研究会の詳細検討

- 6 学習指導研究会（担当地区：南部）・・・ 11月 8日(火) 於；宮田小，飯島中

- 7 第4回役員会・・・・・・・・・・・・・・・・ 11月29日(火) 於；宮田中学校⇒オンライン
 - 学習指導研究会の反省
 - 実技講習会の要項および詳細検討

- 8 実技講習会・・・・・・・・・・・・・・・・ 1月 ~~13日(金)~~ 於；~~赤穂南小学校~~
19日(木) 美篤小学校

- 9 第5回役員会・・・・・・・・・・・・・・・・ 1月 ~~13日(金)~~ 於；~~赤穂南小学校~~（実技講習会后）
 - 実技講習会の反省 19日(木) 美篤小学校
 - 体育研究発表会・総会の要項および詳細検討

- 10 体育研究発表会・総会・・・・・・・・・・ 2月11日(土) 於；赤穂南小学校
 - 会員による実践発表(1～2名)
 - 先輩の先生による講演
 - 令和4年度事業報告および会計報告の承認
 - 懇親会(コロナ感染の警戒レベルによっては中止)

令和4年度 上伊那保健体育研究会名簿

No	氏名	所属	役職	備考	No	氏名	所属	役職	備考			
小学校					中学校							
北部	1	井出 滉己	両小野小		○	北部	46	唐沢 真治	辰野中			
	2	村澤 陽介	辰野西小	研究部長	○		47	梅澤 将寿	辰野中	北部副ブロック長		
	3	柴 哲也	辰野西小	北部ブロック長			48	佐藤 貴紀	辰野中			
	4	大脇 創也	辰野西小				49	近藤 勇人	辰野中		○	
	5	伊藤 貴幸	辰野西小				50	大槻 一輝	箕輪中		○	
	6	小林 裕子	辰野南小 頭	監事	○		51	大嶋 信一郎	箕輪中			
	7	久保田 智	箕輪北小	広報部長	○		52	根橋 拓也	箕輪中			
	8	根橋 一真	箕輪西小		○		53	小林 翔	箕輪中	事務局		
	9	中村 公香	箕輪南小				54	溝口 裕直	南箕輪中	研修部長		
	10	関 和陽	箕輪南小		○		55	小林 純也	南箕輪中			
	11	宮澤 朋弘	箕輪東小 長	副会長	○		56	小穴 智彦	南箕輪中		○	
	12	清水 秀朗	南箕輪小 頭	監事			57	後藤 樹	南箕輪中			
	13	吉田 みさき	南箕輪小		○		中部A	58	竹腰 鮎美	伊那中	中部Aブロック長	
	14	山本 憲吾	南箕輪小					59	原 拓也	伊那中	中部A副ブロック長	
中部A	15	小野 岳司	伊那小 頭	監事		60		松田 慎也	伊那中		○	
	16	辻 真之	伊那小		○	61		宮原 祐史	西箕輪中	研究副部長	○	
	17	関 誠	伊那北小		○	62	垣内 麻以	西箕輪中				
	18	太田 聖尚	西箕輪小 長	副会長		中部B	63	唐澤 浩一	東部中 頭	監事		
	19	石原 広孝	西箕輪小		○		64	星野 潔	東部中			
	20	隈崎 俊哉	西箕輪小 頭	監事			65	東海林 雄大	東部中	広報副部長	○	
21	赤澤 太一	西箕輪小			66		塩崎 寛	東部中				
22	伊藤 達也	伊那養護		○	67		今井 裕也	東部中				
中部B	23	曾根原 浩	新山小 長	副会長	○		68	原 聡美	東部中			
	24	大内 順平	新山小				69	沼野 俊彦	春富中 長	副会長		
	25	小松 郁也	新山小				70	前田 壮大	春富中		○	
	26	唐木 実緒	新山小			71	松村 遥	春富中	中部B副ブロック長			
	27	大日野 剛	美篤小 長	副会長	○	72	桐山 勝次	春富中				
	28	浜田 康敬	手良小 長	会長		73	井内 康夫	高遠中	中部Bブロック長	○		
29	藤原 健吾	手良小 頭	監事		74	熊澤 竜作	高遠中					
30	小椋 裕太	手良小		○	南部	75	齊藤 博	宮田中 長	副会長			
31	田中 由里	西春近北小 頭	監事	○		76	北村 育代	宮田中				
32	前原 修	長谷小 頭	監事	○		77	西尾 智恵美	宮田中				
南部	33	北田 聡一郎	宮田小			○	78	清水 久明	宮田中	南部副ブロック長	○	
	34	長尾 光弘	宮田小				79	保科 功	赤穂中 頭	県理事		
	35	佐藤 瑠郁	宮田小				80	細江 拓郎	赤穂中		○	
	36	滋田 祐希	宮田小				81	中島 弘樹	赤穂中			
	37	中原 加代子	赤穂小	南部ブロック長		○	82	加納 菜弥	赤穂中			
	38	小松 共一	赤穂南小 頭	監事			83	水野 叶夢	赤穂中			
	39	井口 誠	赤穂南小				84	北澤 克彦	東中 頭	監事	○	
	40	江口 貴昭	赤穂南小	事務局		○	85	佐々木 恵理	東中			
	41	原 俊夫	赤穂南小			86	横山 英志	飯島中 長	副会長			
	42	笹岡 理沙	中沢小			87	山田 勝巳	飯島中				
	43	平沢 三奈	中沢小	研修副部長	○	88	高原 大誠	飯島中		○		
	44	小坂 陽子	中川西小		○	89	小澤 恒輝	中川中		○		
	45	塩沢 哲平	中川東小		○							
			学校代表者⇒	○								

No	役 職	氏 名(敬称略)	学 校	備 考
1	会 長	浜田 康敬	手良小	
2	副 会 長	齊藤 博	宮田中	
3	〃	横山 英志	飯島中	
4	〃	曾根原 浩	新山小	
5	〃	宮澤 朋弘	箕輪東小	
6	〃	沼野 俊彦	春富中	
7	〃	大日野 剛	美篤小	
8	〃	太田 聖尚	西箕輪小	
9	監 事	清水 秀朗	南箕輪小	
10	〃	唐澤 浩一	東部中	
11	〃	前原 修	長谷小	
12	〃	藤原 健吾	手良小	
13	〃	北澤 克彦	東中	
14	〃	隈崎 俊哉	西箕輪小	
15	〃	田中 由里	西春近北小	
16	〃	小野 岳司	伊那小	
17	〃	小松 共一	赤穂南小	
18	〃	小林 裕子	辰野南小	
19	県 理 事	保科 功	赤穂中	
20	北部ブロック長	柴 哲也	辰野西小	
21	〃 副ブロック長	梅澤 将寿	辰野中	
22	中部Aブロック長	竹腰 鮎美	伊那中	
23	〃 A副ブロック長	原 拓也	伊那中	
24	中部Bブロック長	井内 康夫	高遠中	
25	〃 B副ブロック長	松村 遥	春富中	
26	南部ブロック長	中原加代子	赤穂小	
27	〃 副ブロック長	清水 久明	宮田中	
28	研究部長	村澤 陽介	辰野西小	
29	〃 副部長	宮原 祐史	西箕輪中	
30	研修部長	溝口 裕直	南箕輪中	
31	〃 副部長	平沢 三奈	中沢小	
32	広報部長	久保田 智	箕輪北小	
33	〃 副部長	東海林雄大	東部中	
34	事務局	江口 貴昭	赤穂南小	
35	〃	小林 翔	箕輪中	

令和4年6月30日

学校長様
会員様

上伊那保健体育研究会会長 浜田 康敬

上伊那保健体育研究会 夏期研修会について（通知）

梅雨明けの候、先生方におかれましては、ますますご健勝にてご活躍のことと拝察申し上げます。

さて、本研究会の夏期研修会も回を重ね、51回目を迎えることとなりました。毎年多くの先生方にご参加いただき、互いに研鑽を積んだり、様々な世代の先生方と親睦を深めたり、よい機会になると好評をいただいております。本年度もコロナ禍での開催のため半日開催となりますが、会員の先生方はもちろんのこと、会員以外の先生方も含め、多数の先生方に気軽に参加いただけますようご案内申し上げます。

記

- 1 期 日 令和4年7月29日（金）
2 会 場 南箕輪小・中学校（分科会, 教材研究）※受付は南箕輪中学校
3 日 程

役員集合	受付	開会行事	研究部より 分科会・教材研究	休憩	分科会 教材研究	閉会行事
8:00	8:20 ～8:35	8:40 ～8:55	9:00 ～10:15	10:15 ～10:30	10:30 ～11:45	11:45 ～12:00

- 4 研究内容
研究テーマ 「すべての子どもが、運動の中心なおもしろさを十分に味わいながら、自ら運動の楽しみ方を創り出していく体育授業」
～子どもとともにめざす授業のゴールイメージの在り方に焦点を当てて～

5 分科会の内容

分科会番号	領 域 ・ 内 容
1	教育課程の授業づくり（西箕輪中・ハードル走）
2	小学校学指研の教材研究・授業づくり（宮田小・器械運動orボール運動(ネット型)）
3	中学校学指研の教材研究・授業づくり（飯島中・バドミントン）

- 6 参加費用 なし
7 持 参 品 筆記用具, 水筒, タオル, **健康チェックシート, 事前にケルンで配布する資料**
※運動のできる服装でお越し下さい。
8 参加申し込み方法

学校代表者が校内の出欠をまとめ、Googleフォームに必要事項を入力の上、7月13日（水）までに送信してください。なお、参加できない場合も同様に送信をお願いします。



《申し込み用 QR コード》

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdSXuWFRirW6RNMGPtMVeKtygR0q63_4_rjb8wMgqDE0thxww/viewform?usp=pp_url 《申し込み用 URL》

上伊那保健体育研究会事務局 江口 貴昭（赤穂南小）

TEL : 0265-81-5700 FAX : 0265-81-7272

令和4年6月30日

学 校 長 様
会 員 様

上伊那保健体育研究会会長 浜田 康敬

上伊那保健体育研究会夏期研究会の可否判断及び 新型コロナウイルス感染症拡大防止策について（通知）

盛夏の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、標記の件につきまして、以下の通り進めて参りたいと考えております。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

記

1 夏期研修会実施の可否判断について

- ・上伊那の感染警戒レベルが5になった場合、夏期研修会の実施を中止とする。
- ・上伊那の感染警戒レベルが4以下の場合、感染症拡大防止対策を講じた上で予定通り実施する。

2 夏期研修会における感染症拡大防止対策

- ・参加者は、事前に配布された健康チェックシートへ体温や前日までの健康状態を記入する。
- ・参加者は、当日受付にて手指消毒、検温、健康チェックシートの提出を行う。
- ・参加者は、マスクを着用する。ただし、実技を行う際はこの限りではない。
- ・消毒液を会場内外や体育館に設置し、参加者がこまめに消毒を行えるようにする。
- ・こまめに会場内の換気を行う。体育館利用時は、常時換気とする。
- ・文具類の貸し借りをしないようにし、各自で持参するよう促す。
- ・実技で使用した物品は、消毒液で消毒する。
- ・参加者は、研修会終了後発熱や倦怠感等の症状が出た場合、すぐに事務局へ連絡する。事務局は、会長へ連絡し、適切な対処をする。

3 その他

- ・不明な点がございましたら、事務局へ連絡をお願いいたします。

以上

上伊那保健体育研究会事務局
江口 貴昭（赤穂南小）
TEL：0265-81-5700
FAX：0265-81-7272

時間	参加者	総務（事務局）	研究部	研修部	広報部												
8:00	役員打合せ (パソコン室)	役員集合（南箕輪中学校パソコン室）															
8:10		<ul style="list-style-type: none"> 打ち合わせ（全体の流れの確認） 準備（名札・名簿・資料） 	<ul style="list-style-type: none"> 分科会会場準備 研究の方向の提案最終確認 	<ul style="list-style-type: none"> 駐車場配置を確認したのち、すぐに案内開始 	<ul style="list-style-type: none"> 打ち合わせ（受付設営） 												
8:15	受付	<ul style="list-style-type: none"> 全体会場へ移動し準備を行う 参加者名簿で分科会の確認をしてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> 全体会場へ移動し準備を行う。 		<ul style="list-style-type: none"> 受付開始（名札配布・出席確認・検温・健康チェックシート^{の提出確認}） 												
8:30	開会行事 (パソコン室)	<ul style="list-style-type: none"> ◎進行（事務局） ○開会の言葉（副会長） ○会長挨拶 (浜田会長) ○研究の方向（村澤部長） ○諸連絡（事務局） ・日程確認、その他 	<ul style="list-style-type: none"> ・開会行事参加 ○研究の方向（村澤研究部長） 	<ul style="list-style-type: none"> ・開会行事参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・開会行事参加（開会行事写真撮影） 												
8:55																	
9:00	分科会 教材研究	<ul style="list-style-type: none"> ・研究部発表準備（PC、プロジェクター、スリット、資料配布） 	<ul style="list-style-type: none"> ・役割分担リーダー、記録 	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会参加 												
10:00	(10分) 休憩・移動	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会会場準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会会場準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・会場準備補助 	<ul style="list-style-type: none"> ・会場準備補助 												
10:10	分科会 教材研究	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会参加 ・今後の日程確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・役割分担リーダー、記録 	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会への参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会への参加 												
<table border="1"> <thead> <tr> <th>分科会番号</th> <th>領域・内容</th> <th>部屋</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>「ハードル走」(西箕輪中学校教育課程)</td> <td>パソコン準備室</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>「マット運動」(宮田小学校学指研)</td> <td>パソコン室</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>「バドミントン」(飯島中学校学指研)</td> <td>パソコン室</td> </tr> </tbody> </table>						分科会番号	領域・内容	部屋	1	「ハードル走」(西箕輪中学校教育課程)	パソコン準備室	2	「マット運動」(宮田小学校学指研)	パソコン室	3	「バドミントン」(飯島中学校学指研)	パソコン室
分科会番号	領域・内容	部屋															
1	「ハードル走」(西箕輪中学校教育課程)	パソコン準備室															
2	「マット運動」(宮田小学校学指研)	パソコン室															
3	「バドミントン」(飯島中学校学指研)	パソコン室															
12:10		<ul style="list-style-type: none"> ・分科会の運営補助（南箕輪小体育館に消毒液を持って行く） 	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会の運営 ・分科会への参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会への参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・分科会の様子を写真撮影 ・分科会への参加 												
12:15	閉会行事	<ul style="list-style-type: none"> ◎進行（事務局） ○分科会報告（各リーダー） ○研究部から (村澤部長) ○会長挨拶(浜田会長) ○諸連絡(事務局) ○閉会の言葉(齋藤副会長) 	<ul style="list-style-type: none"> ・閉会行事参加 ・分科会報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・閉会行事参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・閉会行事参加（開会行事写真撮影） 												
12:30	片付け																

令和4年9月28日

学校長様
会 員 様


上伊那保健体育研究会長 浜田 康敬

第51回 上伊那保健体育研究会 学習指導研究会 開催について

新秋の候、先生方におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、本年度も下記のように学習指導研究会を開催することとなりました。本年度も、助言者として信州大学教育学部の岩田靖先生をお迎えします。体育の授業を通して、自ら主体的に取り組む体育学習の研究をさらに深められる機会としたいと考えております。また、コロナ禍での開催となりますので、感染症対策に万全を期して行います。会員の先生方はもちろんのこと、会員以外の先生方も含めて多くの先生方に参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

記

- 期 日 令和4年11月 8日（火）
- 会 場 宮田村立宮田小学校 飯島町立飯島中学校
- 指導者 岩田 靖 先生（信州大学教育学部教授）
- 公開授業 宮田小学校5年 「器械運動（マット運動）」 授業者 佐藤 瑠郁 教諭
飯島中学校2年 「バドミントン」 授業者 高原 大誠 教諭
- 日 程
8:40～ 8:55… 参会者受付
9:00～ 9:10… 開会行事
9:15～ 9:35… オリエンテーション
9:40～10:25… 公開授業① 宮田小学校 5年「器械運動（マット運動）」
10:25～ … 飯島中へ各自移動
11:20～11:40… 受付（飯島中学校）※ 中学からの参会者のみ
11:45～12:35… 公開授業② 飯島中学校 2年「バドミントン」
12:40～13:40… 昼 食
13:40～14:20… 授業研究会（小学校）
14:25～15:05… 授業研究会（中学校）
15:15～16:45… 講演会『運動感覚を大切にしたい技能学習のあり方』岩田 靖先生
16:45～17:00… 閉会行事
- 持ち物 昼食 飲料 上履き 筆記具 バインダー（必要に応じて）
- 参加申し込み方法 《申し込み用QRコード》
学校代表者が校内の出欠をまとめ、Googleフォームに必要事項を入力の上、10月6日（水）までに送信してください。なお、参加できない場合も同様に送信をお願いします。

- その他
11月に入ったところでの、新型コロナウイルスの感染状況によって可否判断を行います。

上伊那保健体育研究会
事務局 江口 貴昭
(赤穂南小学校)
TEL 0265-81-5700
FAX 0265-81-7272

上伊那保健体育研究会学習指導研究会 11/8(火)タイムテーブル

事前			謝礼(講師、会場校)、お茶菓子の準備 講師お土産準備(事務局)		横断旗の準備	非接触型体温計、手指消毒液、健康チェックカード予備、名札、参加者名簿		
時刻	研究会の流れ	各部の動き						
		総務役員	事務局	研究部	研修部	広報部	正副ブロック長	
		○浜田 齋藤 横山 曾根原 宮澤 沼野	○江口 小林 宮田小集合 ・会場校へあいさつ(江口) ・会場校に謝礼渡し(江口)	○村澤 宮原	○溝口 平沢	○久保田(智) 東海林	柴・梅澤・竹腰・原 井内・松村・中原・清水	
		役員集合						備考
		打ち合わせ会(会場:梅の子ホール)						・駐車場の手伝い(西・校庭)
			・本日の日程確認(江口) ・開会式会場まで全体統括	・本日の分担確認 ・オリエンテーション確認 ・授業会場の確認	・本日の分担確認 ・駐車場誘導分担	・本日の分担確認 ・受付場所は生徒玄関 ・名簿、名札確認 ・配布指導案の確認 ・役員の受付開始	・受付の手伝い (健康チェックカードの回収、当日の体温測定)	
8:15	役員集合 打ち合わせ 準備 宮田小(会場:梅の子ホール)							
8:40	一般参加者受付 宮田小学校玄関	・岩田先生お出迎え (正副会長・事務局) ※講師控入室:校長室 ・講師接待(事務局) ・開会行事会場へ移動	・開会行事準備 ※必要に応じて本日の日程確認 ・案内誘導(会場校長)		・案内 ※受付と連絡を取り合って	・受付業務 ・指導案等の資料を渡す ・弁当代徴収(会長のみ) ・名簿チェック(出欠)	・駐車場の手伝い ・受付の手伝い (健康チェックカードの回収、当日の体温測定)	
8:55					※8:55には終了			
9:00	開会行事 会場:(梅の子ホール)	・開会行事参加	・開会行事進行(小林)	・開会行事参加	・開会行事参加	・開会行事参加 ・受付の状況を見ながら	・開会行事参加	
	○開式のことば (齋藤副会長) ○会長挨拶 (浜田会長) ○会場校校長挨拶 (田中校長) ○諸連絡 (江口) ○閉会のことば (齋藤副会長)		・日程の連絡(江口)					
9:10				・オリエンテーション準備				
9:15	オリエンテーション 会場:(梅の子ホール)	オリエンテーション参加	オリエンテーション参加	オリエンテーション進行 (進行 村澤) ・小学校説明(村澤) ・中学校説明(宮原)	オリエンテーション参加	オリエンテーション参加	オリエンテーション参加	
9:35								
		授業会場へ移動						
9:40	公開授業① 会場:宮田小体育館	・授業参観	・授業参観	・授業参観 ・授業記録	・授業参観 ※必要に応じて授業記録の補助	・授業参観 ・記録写真撮影	・授業参観	
10:25	「器械運動(マット運動)」 佐藤 瑠都先生						※帰る方の名札回収	
		飯島中へ移動						
	※宮田小の会場片付け (小林)	・岩田先生を飯島中へご案内(お車で正面玄関脇に移動していただく)	・会場校へ挨拶(江口)	・飯島中体育館へ移動	・案内表示の設置確認 ・必要に応じて駐車場誘導	○中学受付 11:20~11:40 ※中学校生徒玄関にて(健康チェックカードの回収、受領印の押印、当日)	・文化館駐車場入り口で誘導 2名	
11:45	公開授業② 会場:飯島中体育館	・授業参観	・授業参観	・授業参観 ・授業記録	・授業参観 ※必要に応じて授業記録の補助	・授業参観 ・記録写真撮影	・授業参観	
12:35	「バドミントン」 高原 大誠先生							
12:40	昼食 会場:(視聴覚室・3F会議室)	・岩田先生を校長室へ案内 (校長室にて) ・岩田先生控入室:1F会議室 ・授業研究会会場へ案内	・講師、会長、会場校長の弁当を届ける ・昼食(校長室)	・昼食	・昼食	・弁当受け取りと支払い ・弁当配布 (講師1、会場校長1、会長1計3)	・昼食	
13:40	授業研究会① 会場:(視聴覚室)	・授業研究会参加	・授業研究会参加	・授業研究会準備	・授業研究会参加	・授業研究会参加 ・記録写真	・授業研究会参加	
14:20				・授業研究会司会進行 全体討議	・授業研究会参加			
		休憩						
14:25	授業研究会② 会場:(視聴覚室)	・授業研究会参加	・授業研究会参加	・授業研究会司会進行 全体討議	・授業研究会参加	・授業研究会参加 ・記録写真	・授業研究会参加	
15:05								
		休憩および講演会準備						
		・講師案内	・会場準備 ・演題掲示、演台、水の準備	・会場準備指示	・案内表示の片付け	・講演会記録準備 ICレコーダー、カメラ等		
15:15	講演会 会場:(視聴覚室)	・講師案内 ・進行(事務局) ・講師紹介(浜田会長) ・講演会参加 ・質疑応答	・講演会参加	・講演会参加	・講演会参加	・講演会参加 ・講演会記録	・講演会参加	
16:45								
16:50	閉会行事 会場:(視聴覚室)	・閉会行事参加	・閉会行事進行(小林)	・閉会行事参加	・閉会行事参加	・閉会行事参加	・閉会行事参加	
	○開式のことば (宮澤副会長) ○お礼のことば (曾根原副会長) ○会場校校長挨拶 (横山校長) ○諸連絡 (江口) ○閉会のことば (宮澤副会長)	・講師案内(校長室へ)	・連絡(江口)					
17:00				片づけ			※名札回収	
		・岩田先生お見送り	・会場片づけ ・会場校校長に謝礼・挨拶	・会場片づけ ・講演会関係片づけ	・会場片づけ ・案内表示関係片づけ	・会場片づけ ・ゴミ関係片づけ ・会報用原稿依頼(久保田)		
17:10								

上伊那保健体育研究会小学校部会 学習指導案

令和4年11月8日(火) 第2校時
5年3組 男子16名, 女子17名 計33名
授業者 佐藤 瑠郁

1 単元名

「マット運動」(B 器械運動 ア マット運動)

2 単元設定の理由

本学級では、休み時間に多くの児童がサッカーや鬼ごっこ、バスケ、ドッジボールなどで体を動かして遊んでいる。一方で、教室で絵を描いたり、読書をしたりすることを好む児童も、全体の2、3割程度いる。体育の授業では、5学年に入ってから、バスケットボール、水泳、鉄棒と高跳びを行った。どの種目においても、子どもたちは一生懸命に取り組む様子があり、体を動かすことが好きな児童が多い。一方で、できない技に直面したときに、「できない」と諦めが早い児童もいる。クラスの雰囲気としては、何事にも素直で、思ったこと、感じたことを言葉で表すことが得意な児童が多い。また、他人を思いやり、人の役に立つことが好きな児童も多い。しかし、相手への伝え方が分からず強く言いすぎてしまったり、初めてのことへの不安感を強く感じ、挑戦することを過度に拒んだりすることも多い傾向がある。他者と協働して、作り上げる経験が少ないためか、一部の仲の良い人や、話し易い人とまとまったりする姿もみられる。総じてクラスの課題は、「色々な意見に耳を傾け、他者と協働して助け合う」ことが挙げられる。

本単元を始めるにあたってとった「4年時までのマット運動を振り返って」のアンケートの結果は、「マット運動がすごく楽しかった」と答えた児童が6名(21%)、「まあまあ楽しかった」と答えた児童が14名(48%)、「あまり楽しくなかった」と答えた児童が9名(31%)であった。マット運動で面白くなかったこととして、難しい技が多かったことや、何回やってもうまくならない技があったこと、着地面が柔らかくなく、恐怖心を感じていることなどを感じている児童がいる。

そこで、①扱う技を4つ(大きな前転、跳び前転、後転、側方倒立回転)に絞ることで、技のポイントを仲間と共有しやすくする。②技のポイントを学習カードにまとめ、それを用いて、擬音やリズム、比喻などの言葉を使って自身の感覚を表現できるようにしたり、自分の課題にあった場の選択ができるようにしたりする。③ICT 機器を活用することで、仲間同士で自然にアドバイスし合えるようにする。これらを通して、子どもたちが技を習得し、完成度を向上させることの喜びや、仲間と協働して高め合うことの面白さを感じることができるのではないかと考え、本単元を設定した。

3 教材化されたルールと場の設定

(1) 用具・場の工夫

別紙参照

(2) 技の組み合わせについて

大きな前転、跳び前転、後転、側方倒立回転の中から2～3個組み合わせる。

(3) 資料・学習カードの工夫

別紙参照

(4) ドリルの練習の工夫

別紙参照

4 子どもの動きの予想とゴールイメージ、課題の決め出し

(1) 予想される技の習得様相

① 単元序盤

オリエンテーション時に連続技や組み合わせ技の動画を観る中で、自分の実態にあう技、興味のある技に挑戦することができることや、それらを組み合わせた演技を行うことを知り、やってみたいと思うだろう。また、自分たちがこれまで経験してきた前転よりもダイナミックに回る前転の動画を見ることで、同じ技でも演技する人によってスピードや滑らかさに差があること、それらの要素が技の見栄えに関わっていること

に気づき、単に技が「できた」「できない」だけでなく、美しさや完成度といったことに関心を持つようになるだろう。

共通課題として、「大きな前転」の練習に全員で取り組む中で、本単元における基本的な学び方の流れをつかんでいこう。学び方の流れとしては、最初に教師から示される外的な動きのポイント（着手位置、視線、踵の引き込み等）を一人一人が意識して練習し、その中で「いきおいよく・いきおいを止めずに」に回れる子が出てくるだろう。次に上手に回れた子が、まだ上手く回れない子にアドバイスをすることで、教師から示された外的な動きのポイントに加えて、自分はどんな感覚・感じで回っているかを表現する言葉（これを自身の感覚とする）が出されるようになるだろう。「ゾンビみたいに下から手」（比喻）、「膝はそんなに曲げないけど最後にキュッ」（擬音）、「とおっ・ふわっ・シュパッ」（リズム）といった言葉で表すといいことを子どもたちの言葉を教師が拾い、共有していくと、一人一人が自分自身の感覚を表現し、外的な動きのポイントと照らし合わせながら「美しい大きな前転」の追究をしていこう。

② 単元中盤

大きな前転の練習で習得した学び方を活かして、他の技の練習に取り組んでいこう。全体での学習を引き続き行う中で、それぞれの外的な動きのポイントを「いきおいをつける工夫」「いきおいを止めない工夫」として整理していけるようになるだろう。ICT機器も積極的に活用し、外部観察（友だちの目やカメラを通した自分の演技）と自身の感覚のずれを丁寧に把握し、「遠くへ飛ぶのがどうしても怖いんだよ」「膝を曲げるのはもっと後なのかな？」等、それぞれが掴んだ自身の感覚やコツを友だちと意見交流しながら、何度も練習に取り組むことを通して、自身が挑戦したい技や課題となる動きが明確になっていこう。

③ 単元終盤

単元中盤までの学習で練習した技の中から、さらに完成度を高めたい技を選んで練習に取り組んでいこう。学習資料を参考にしながら子どもたちから出された動きの課題を教師が整理し、それぞれの課題に即した練習方法を提示することで、一人一人が自分の実態に合った練習方法を選択し追究を進めていこう。

④ ゴールイメージ

「自分だけの美しい連続技・組み合わせ技を創り上げよう！」

⑤ ゴールイメージに向けた課題の決め出し

1) 予想される課題

- ・安全に取り組むための動きづくり
- ・美しくできるためには、どんなところに気をつければ良いか
- ・それぞれの技の動きのポイント（外的なポイント）
- ・自分がどんな感覚・感じでその動きを生み出しているのか
- ・スムーズに、途中で体のどこかが痛くないようになめらか（スムーズ）に回る
- ・いきおいをつける・いきおいを怖がらずにつける
（着手位置・体の投げ出し感覚・感じ・腰の上がる感覚・感じ）
- ・いきおいを止めずに回りきる
（順次接触の感覚・感じ・足をたたむ（体を小さくする）タイミング・頭を振るタイミングや視線）
- ・技ごとに対する自分の実態把握
- ・挑戦したい技の課題部分とその練習方法
- ・技のできばえを高めていくための動きの工夫

2) 本質的な課題

いきおいをころさずに回るための動きの工夫を確認していこう

～どういきおいをつけるか・どういきおいを止めずに回るか～

5 単元の目標

(1) 単元の目標

- ・マット運動の行い方を理解するとともに、自己の能力に適した回転系の基本的な技を安定して行ったり、その発展技を行ったり、それらを繰り返したり組み合わせたりすることができるようにする。

【知識及び技能】

- ・自己の能力に適した課題の解決の仕方や技の組み合わせ方を工夫するとともに、自己や仲間の考えを他者に伝えることができるようにする。【思考力・判断力・表現力等】
- ・マット運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができるようにする。【学びに向かう力、人間性等】

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ア マット運動の技の行い方について理解している イ 基本的な回転系を安定して行うとともに、その発展技を行ったり、それらを繰り返したり組み合わせたりすることができる	ウ 撮影した自分の映像や仲間からのアドバイスをもとに、自己の課題や技のポイントを見つけている。 エ 見つけた課題を解決するために、自己の課題に適した練習の場や方法を選んでいる。 オ 観察し合ったり、ICT機器を活用したりして、技のポイントや、仲間のできていることや改善点を伝えている。	カ マット運動の基本的な技や発展技に積極的に取り組もうとしている。 キ 学習の仕方や約束を守り、仲間と観察し合ったり教え合ったりしようとしている。 ク 場の準備や片づけを仲間とともにしようとしている。 ケ 仲間の考えや取り組みを認めようとしている。 コ 場の安全に気を配ろうとしている。

5 学習の構想

(1) 時間計画 (全8時間あつかい)

はじめ	なか①			なか②	なか③	まとめ
・オリエンテーション	・大きな前転、後転、側方倒立回転 (跳び前転)			・技の決定 ・課題にあった練習方法の確認	・技の完成度の追究	・発表会
1時	2時	3時	4時	5時	6・7時★	8時
マット運動に対する実態の共有	道具の準備、準備運動 ストレッチ&ドリル (動きづくり)					
メインの技の紹介	本時の課題確認					
授業の進め方の確認 ドリル (動きづくり) 「大きな前転」に挑戦	外から見た時と、自分の感覚との違いを確認する			自分の技・課題を学習カードや映像を使って確認する	チームやペアごとで課題の確認と練習	
現在の自分の映像を撮影する		連続技の撮影	連続技の撮影		連続技の撮影	連続技・組み合わせ技の発表
<ul style="list-style-type: none"> ・本時のふり返り ・片づけ 						単元のまとめ 片づけ

★本時

(2) 単元展開

段階	学習活動	教師の支援・評価	時間
	<p>○オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・以前にとったマット運動のアンケート結果を紹介して, クラスの思いを確認する ・メインの技(大きな前転, 後転, 側方倒立回転, 跳び前転)を確認する ・大きな前転を例にしなが, 学習の進め方や, 学び方を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板でアンケート結果の意見を示して, 全体で共有できるようにする ・連続技・組み合わせ技の示範演技の映像を見せ, 今回の技の確認と, 美しく一つ一つの技を行うことへの興味をもってもら ・自分たちの映像と, 示範映像を見て, 違いを子どもたちが発言できるようにする ・前転の学習カードでポイントを確認する ・単元計画を提示し, 学習の流れをつかめるようにする 	
はじめ	<p>単元のためあて(ゴールイメージ): 自分だけの美しい連続技・組み合わせ技を創り上げよう!</p>		1
	<ul style="list-style-type: none"> ・準備する道具や分担, 場の確認をする ・ストレッチやドリルのやり方を知る 【ストレッチ】 ・屈伸運動 ・くびのストレッチ・肩のストレッチ ・開脚ストレッチ ・手首のストレッチ 【ドリルサーキット】 ・あざらし ・クマ ・カエルの足打ち ・スーパーマン ・倒立バタン 【慣れの運動】 ・ゆりかご <p>○大きな前転を自分でやってみる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな前転のポイントを参考にしながら, 実際に自分でやってみる 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちと一緒に, マットの持ち方や運び方, 置き方等を確認する ・ストレッチとドリル, 慣れの運動のやり方を毎時間自分たちでできるように, 視覚的な説明も提示しながら実際に1つ1つのやり方を体験する ・大きな前転を実際にやってみて, うまくいった人, いかなかった人がいる中で, できた点やできなかった点などを全体で共有し, 次時への見通しをもてるようにする <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">知・技ア(観察)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">主ク(観察)</div> </div>	

な か ①	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">めあて：それぞれの技を、いきおいを止めずに美しく行うコツをつかもう</p> <p>○「大きな前転」を美しく、スムーズにおこなうための、「技の見方や学び方」について技を実践しながら知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな前転の外的なポイントをつかむ ・外的なポイントをもとにしながら、自身の感覚を表現し合う <p>○「後転」を美しく、スムーズにおこなうためのポイントを確認し、実際にやってみる</p> <p>○「側方倒立回転」を美しく、スムーズにおこなうためのポイントを確認し、実際にやってみる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・外的なポイント(学習カード等)をもとに自身の大きな前転の状況を確認する (iPad の使い方や、動画の撮り方も確認する) ・ドリルや慣れの運動の意味について、扱う技と結びつけながら子どもたちに伝えていく ・自身の内部感覚を比喻や、擬音、リズムなどの言葉を使って表現できるように、子どもたちに「どんな感じだった？」と問いかけをする ・比喻や擬音、リズムで表現した子どもの言葉を拾い、全体でも共有する ・ICT 機器を自分が着目したい点を確認できるように、撮る角度や高さなどの撮影方法の工夫を伝える (ICT で撮影することで外部観察と自身の感覚のずれに気づけるようにする) ・自分の課題が見つからない児童には、教師がヒントを与えたり、直接伝えたりする ・子どもたち同士でのアドバイスが増えるように、随時「○○さんの今の完成度は何点ぐらいかな」「○○さんのどこがかっこよかったかな。どうすればもっとよくなるかな。」などと質問をする ・「大きな前転」で学習した、技の見方や分析の仕方と「後転」「側方倒立回転」での技の見方や分析方法を比較し、学習を結び付ける ・「側方倒立回転」では、壁倒立等の腕支持系の練習を増やし、子どもたちが安全に練習できるようにする ・跳び前転に挑戦したい児童には、安全面を考慮しながら、練習方法を紹介する ・連続技・組み合わせ技のパターンを再度確認する <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">知・技イ (観察・映像・発言)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">思・判・表ウ (観察・発言・ワークシート)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">思・判・表オ (観察・発言・ワークシート)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">主コ (観察)</div>	2 ・ 3 ・ 4

<p>なか②</p>	<p>めあて：挑戦したい技を決め、課題を明確にしよう</p> <p>○自分が挑戦したい技の決定と課題を明らかにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で今までやった技(2～3つ)を取組んでみる。それを踏まえて、技の決定と学習カードや映像を参考にして課題を明らかにする <p>○課題にあった練習の場の使い方を確認する</p> <p>○自分の課題にあった練習場所を選択する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の技への挑戦が厳しい児童には、同じ技の連続でもよいことを伝える ・何を課題にしながら、どの技を追究していくのか、学習カード等で明確にできるようにする。 ・実態に応じた練習方法を選択しているのか確認する ・実際にどこの場所で、どのように、何を意識して練習するのか確認する <p>思・判・表エ (観察・発言)</p> <p>主カ (観察・ワークシート)</p>	<p>5</p>
<p>なか③</p>	<p>めあて：挑戦する技の完成度を高めよう</p> <p>○選択した自分の課題にあった練習の場を、技の完成度を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技のポイントを意識して練習する ・同じ技に取り組む仲間同士でアドバイスをし合う ・iPadで撮影しながら、課題が改善されているのか精査する 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ技を練習する人とペアやトリオをつくる。 ・学習カードや映像を見て、ペアやトリオで助言をしたり、補助をしあったりできるようにする ・示範演技と自分の演技を比較しながら、技のスムーズさを高めていけるようにする。 ・自身の感覚を比喻や擬音、リズムを使って表現することを促す ・以前できていたことができない時は、スモールステップで段階を戻しながら課題を1つ1つ解決していくことを促す ・追究したい技が、納得いくまでできた児童には、追究できたことへの賞賛をしつつ、さらに完成度を上げるためのヒント(左右の体のバランスや技の安定感等)を伝える <p>主キ(観察) 主ケ(観察・ワークシート)</p>	<p>6・7 (本時)</p>
<p>まとめ</p>	<p>めあて：自分だけの美しい連続技・組み合わせ技を発表しよう</p> <p>○連続技・組み合わせ発表し合う(グループをつくる)</p> <p>○単元のまとめをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元全体をふり返り、学んだこと成長したこと、面白かったことなど自己評価する 	<ul style="list-style-type: none"> ・演技の良さを伝え合う場を設定する。 ・以前の映像と発表の映像を比較することで、技の美しさや完成度の高まりを子どもたちが実感できるようにする <p>主ケ(観察・ワークシート) 知・技イ(観察・映像・発言)</p>	<p>8</p>

6 本時案

(1) 主眼

前時の取り組みを受け、「前時の課題を引き続き取り組みたい」「できるようになった技の美しさや安定性を高めたい」「他の技を高めたい」と感じる子どもたちが、学習カードやICT機器の映像を活用しながら、ペアやトリオで助言し合うことを通して、自分の技の課題やそれにあった練習方法を選択し、連続技・組み合わせ技を次回発表することの見通しをもちながら、練習に取り組んでいる。

(2) 本時の位置 (8時間中第7時)

前時：挑戦する技の完成度を向上させるための、課題解決にむけた練習に取り組んだ。
 次時：グループごとに、自分だけの美しい連続技・組み合わせ技を発表する。

(3) 指導上の留意点

- ・同じ技を選んだ人同士でペアやトリオをつくる
- ・見た目からのアドバイスだけでなく、「こんな感じでやった」という自身の感覚を大切にされたアドバイスができるように教師が問いかけたり、子どもたちの言葉を広げたり、つなげたりする

(4) 展開

段階	学習活動・予想される児童の反応（・）	教師の支援・評価	時間
はじめ	1 場の準備をする。 2 準備運動をする。 3 ドリルサーキットを行う。 4 本時取り組む技につながる、慣れの運動を選択し、ペアやトリオで行う。 前転・後転…大きなゆりかご 側方倒立回転…倒立の足の入れ替え 5 集合、整列をし、挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> 健康観察をし、服装を整えさせる。 安全に留意し、協力して準備をさせる。 マット等の用具の置き場所を模造紙で示し、決められた場所に準備しやすいようにする。 体のどこを意識して行っているのか考えながら、しっかり体をほぐすように声かけをする。 	8
なか	6 本時のめあてを確かめる。	<ul style="list-style-type: none"> 前時の子どもたちの振り返りから、本時のめあてにつながるものを全体で共有する 連続技・組み合わせ技を安定して行うためにも一つ一つの技を高めることの大切さを確認する。 	4
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> めあて 連続技・組み合わせを意識しながら、 挑戦する技の、美しさやスムーズさを高める練習をしよう </div> 7 技のレベルアップを目指して練習をする。 <ul style="list-style-type: none"> お手本の手の着く位置は、もっと遠くにあるよ。 うまくいかないから、もう一回坂道マットで練習してみようかな。 どこができていないのかは分かっただけ、どうしたら直せるのかな。 8 連続技・組み合わせ技の撮影をする <ul style="list-style-type: none"> 次回も今日のように、美しくやりたいな 今回は最初の大きな前転で乱れたから、次回は最初の技をもっと丁寧にやりたいな 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の実態に応じた練習場所や練習方法を選択できているのか確認する。 技の完成度が高まっている児童には、さらなる完成度を上げるためのポイントを、学習カードや映像等を遣いながら、たずねたり、ヒントを出したりする。 どんな感じでやるとうまくいったのか、擬音、比喩、リズムで表せている児童の言葉を拾って、他の児童にも伝える 自己の課題解決ができずに困っている児童には、できている児童からのアドバイスを聞いたり、教師が実際に技を行ったり、スモールステップで場を変えるように促す。 	20 5
まとめ	9 本時を振り返り、次時のめあてを立てる。 <ul style="list-style-type: none"> 前回は、側方倒立回転がスムーズにできなかったけれど、今回練習してみて安定してできるようになったな。 今日は大きな前転でヒョイッという感じでやったらうまくいったから、次回の発表でもそれを意識しながらやってみようかな 10 全体で学習のまとめをする。 11 整理運動をし、場を片付ける。 12 集合、整列をし、挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りでは、同じ技で行ったペアやトリオでまとまって振り返るようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 自己の動きを見返し、仲間からのアドバイスを基に自己の課題に気づき、場や方法を選択し、解決の見通しをもって練習していたか。思・判・表ウ・エ（発言、観察、ワークシート） </div> <ul style="list-style-type: none"> 児童の姿や発言から、よい気づきがあったものを全体に広めるようにする。 安全に留意し、協力して片付けをさせる。 	8

(5) 研究会で話題にしていきたいこと

○本単元での教材化（手立て）は、5年3組の子どもたちがマット運動の楽しさを味わうのに適していたか。

①扱う技を4つ(大きな前転, 跳び前転, 後転, 側方倒立回転)に絞ったこと。

②技のポイントをまとめた学習カード。

③ICT 機器の活用。

○本時に至る単元展開及び本時における教師の教授行為（学習課題の把握、ドリルや練習での内部感覚を引き出す言葉かけ、全体でのふり返り等）は、5年3組の子どもたちがゴールイメージにつながる追究を進める上で有効であったか。

I 授業者の記録（単元記録）

第1時 ～美しい連続技を目指したいね～

オリエンテーションでは、事前に子どもたちからやりたい技のアンケートをとり、アンケートを基にメインの技を決めだした。示範演技の映像を見ながら、気づいたことを挙げてもらった。子どもたちから出た「美しい」「丁寧」「大きい」といったゴールイメージに関わる言葉をひろいながら、単元のゴールである、「自分だけの美しい連続技・組み合わせ技を創り上げよう」というゴールイメージを共有できた。さらに、自分たちの前転と、お手本動画の前転を見比べることで、「自分の前転は、もっと美しくできるんだ」という意欲も引き立てることができた。その後、ワークシートを見ながら、実際に自分で大きな前転を行った。子どもたちは、「うまくできない」、「スムーズに回れない」、「流れるようにできない」という声が出た一方で、「ピョーンとやるとうまくいく」といった擬音を使った言葉も出てきていた。活動時間が少ないにもかかわらず、子どもたちは「美しさ」を意識しながら、自分の動きや、コツを捉えようとする姿があった。

ふり返りでも、「ピョーンと跳びたい」「手の着く位置を遠くにしたいたい」など、仲間の言葉から自分の動きに繋げようとしたり、自分の課題を明確にする記入が見られた。

第2時 ～勢いをつける、勢いを殺さないために～

この時間は、改めてドリルと慣れの運動を確認した後に、前回のふり返りで出てきた「ピョーン」や「流れるように」という言葉をクラス全体で共有しながら、勢いをつけること、そして勢いを止めないことに分類して、ポイントを確認した。

ワークシートを見ながら、子どもたちは大きな前転を練習した。手を着く位置が遠くしたいけれど、恐怖心から手を遠くに着けずに苦戦する子もいた。赤玉を置いて、手をどこに着けばいいのか、意識しながら取り組むことで、少しずつ恐怖心を取り除くことができた。回転する時に、足が開いてしまったり、立つ瞬間に足をお尻のしたに入れ込むことができない子もいた。次時の課題として、ふり返りに書く様子が見られた。前転のスタートを、しゃがんでからスタートなのか、それとも少し腰を落とした中間なのか、子どもたちの中ではっきり意識統一できていなかったため、技のスタートははっきりさせるべきであったと感じた。

ふり返りでは、「腰をもっと高くしたい」「ピョーンをできるようにした」など、自分の体をどのようにコントロールしたいのか、見通しをもつことができていた。

第3時 ～後転をスムーズに行うためには～

大きな前転を振り返りつつ、子どもたちが後転においても「勢いを殺さない」という意識付けで練習に取り組んだ。お尻rocketで遠くにお尻を着く練習をした。その後、マットで後転に取り組み、勢いよく後ろに転がることができている姿が多く見られた。「今までに後転できたことがなかったのにできた！」と勢いを殺さずに回転することの手応えを感じる様子もあった。ただ、回転した時に、手をしっかり着くことができない児童や、回転ができては足ではなく膝で着地をしてしまう児童もいた。

ふり返りでは、「腕をバネのように使えばいい」「腕を伸ばす」という発言が生まれ、最終局面における、体の支持と、押し返しをすることでスムーズに立つことへ意識を向ける児童が多くいた。

第4時 ～側方倒立回転で足をピンと伸ばしたいね～

示範演技を動画で示しながら「どこが綺麗かな？」と質問しながら、中間局面における倒立経過の過程を子どもたちと把握した。まず、慣れの運動で川跳びや、腕立て横飛び越しを行った上で、壁倒立を行った。自分で足を振り上げて壁倒立ができる児童と、壁登り倒立を最初に行う児童がいた。壁上り倒立ができると、振り上げて倒立することに挑戦する姿も見られた。その後、実際に側方倒立回転を練習した。倒立を最初に練習したことで、手を着くことへの不安は子どもたちの様子から見られなかった。また、倒立をしたことで、両手を横ではなく、縦にして側方倒立回転に入れる児童も多く見られた。両方の膝を伸ばしながら回転することで、苦戦している子も見られた。

ふり返りでは、「側方倒立回転の最初の入りは上手くできたけれど、後半が上手くできなかった」「起き上がるのが難しかった」と、後半部分に難しさを感じている児童が多く見られた。

第5時 ～この技に取り組みたい、まだまだなんだよね～

この時間では、まず場の使い方を確認した。次回と次々回で追究に入った時に、自分ですぐに場所を選び練習できるようにするためであった。時間的に、全ての場を確認することができなかった。場の確認は、子どもたちが自分で自分の課題にあった場所を選ぶためのベースになる点であるので、もう前の時間から確認時間をとるべきであった。その後、今までやった技を実際に自分で行い、どの技にするのか、そしてどこに課題があるのか決め出した。子どもたちは、今までの技に再度取り組み、「この技があんまりできなかった」と言いながら、追究でどの技をしたいのか明確にしていた。ふり返りシートでは、自分の課題は何かを、他の友だちからの意見を参考にしながら見つけ出す記入も見られた。グループ毎で練習をすることや、ワークシートで見合う視点を伝えたことで、こうしたお互いに見合う良さを感じることができた。

第6時 ～仲間とともに、自分の動きを高め合いたいね～

事前に発表した、ペアやトリオでそれぞれの課題にあった場所で練習をした。ペアやトリオで活動することで、共通の技を突き詰めることができ、「もっとここをこうすればいいんじゃない？」という子ども同士の学び合いが生まれやすくなっていた。また、「俺もその意識でやってみる！」「今のどうだった？」とお互いに触発されながら積極的に見せ合い、練習に取り組む様子があった。しかし、「よく分からない」となった時に、iPad を使ったり、学習カードでポイントを確認する姿が少なかった。クラス全体としても、困った時や、分からなくなった時にどこに、どのように頼ればいいのかを、明確にするべきであったと感じた。

第7時（本時）～さらに上の美しさを目指して～

「連続技にするとうまくできない。連続技にするためにも、1つ1つの技の精度をさらに上げよう」という意欲のもと授業は始まった。発表前、最後の追究の時間でもあり、子どもたちは大いに練習に励む時間になった。共通の技を高めるペアやトリオごとに、それぞれの場所について積極的に挑戦する姿もあった。「グッとやる感じだよ」「今のはピンとなっていたのかな」など、子どもたちの口から自然と擬音を表す言葉がけが生まれていた。単元前半で、より多くの擬音語を使うことで、自分の内部感覚に目を向ける手助けになったと思われる。分析を子ども同士で行ったり、自分の感覚を相手に伝える姿も見られるようになっていた。教師からしか学ぶことができないという意識は、単元終末にはかなり薄くなっていた。

単元全体を振り返って

本単元を振り返ると、オリエンテーションにおいて、技を美しくできることのイメージをもつことができたことが、子どもの学びのベースになったと思う。また、技の数を絞ったことで、一つ一つの技の要素を丁寧に抑えながら習得することができ、子どもたちの中で手応えや満足度の大きい時間になっていたと思う。

しかし、場の設定が単元後半になってしまったことで、追究の時間で「この場所はどのように使うのか」と困る様子もあり、スムーズさを欠けてしまっていた。単元前半から、場の準備は行い、用具のセッティングや使い方に慣れておくと、単元終盤での練習もより精度の高いものにできたのではないかと思った。また、iPad の使い方に関しても、指導の甘さがあった。子どもたちの認識として、iPad をどのタイミングでどのように使えばいいのか確認するべきであった。意識統一されていることで、自分の動きの課題だけでなく、他の人との課題の発見にも役立てることができると思う。学習カードに関しても、カードをより有効に活用するために、技の練習中にすぐに立ち返ることができるように、使い方を単元前半から指導するべきであった。また、内部感覚に子どもたちが目をむけるために、場の準備や学習カードの使い方を、単元前半から多く使っていくことが必要になると感じた。

11 / 8 (火) 授業記録

M 女児・K 女児 (M 児を中心に)

赤穂小学校 中原 加代子

1. 子どもの様子

(1) 準備～課題把握

K 児と M 児は本時、「大きな前転」を選択していた。準備運動と全体での課題把握終了後、お互いのカードを見合ったりひっそりと言葉を交わし合ったりしそれぞれのめあて等を確認しあっていた。K 児は「手を遠くにつく。側方倒立回転からふらふらしないで(技がつながられるよう)しっかり遠くにつく」、M 児は「おへそを見るように転がる。マットに段差をつける」と記されていた



(2) 追究～連続技

練習時間になると、すぐに坂道マットへ。ちょうど同じ技を練習する男子3人となんとなくかかわりながら練習を進める。坂道マットで黙々と大きな前転を7、8人で繰り返してやっていた、「これ、エンドレス？」なんていうつぶやきがありながらも自分の回転を確かめながらくり返しくり返し行っていた。練習開始から5、6分経った頃(9:55)、先生が「坂道マットでO.K だったら本番マットへ



行ってもいいよ。」の全体指示を聞き、K 児と M 児、男子3人、5人ですぐさま移動を始める。どこが本番マットか、どこを使っていいのか少し迷う。本番マットで大きな前転をし坂道マットでやるのとの違いを少し感じた表情をしたり二人でひっそり言葉を交わしたりする。数分後(10:00)、先生が「ペアで見合ってアドバイスしながら進めてね。」というような全体指示を出すと、M 児が K 児に何やら言葉をかける姿が見られた。さらに先生からの全体指示



(10:02) で「動きを確認したかったら今から iPad 使っているよ。」で K 児と M 児は取りに行く。1 回撮影して見合っているときに先生が M 児と K 児のところに来て、「どう？」と声をかける。M 児がおへそを意識して練習していることを確認し「そこについてどう？」と先生が問うと「だいぶできるようになった。」と返答。「やってみせて。」となり大きな前転をやって先生にみてもらい、「いいじゃん、安定している。」と先生が言ってくれてうれしそうにしていた。



練習時間が終わり、「各グループに戻って撮影をしよう。」の全体指示(10:09) で M 児はグループ4人で撮影を始める。M 児は2番目に撮影してもらい同グループの C 女児に「M ちゃんいいんじゃない。」と言ってもらう。グループ内の児童から、動画撮影は今日練習した技だけか？動画は何回録ってもよいのか？という個別の質問が教師にされていた。連続技・組み合わせ技の撮影の子どもたちの理解がまちまちだった様子がみられた。



(3) ふり返り

学習カードのふり返りには、M児は「おへそを見ることもできて、きれいに回れるようになった」と記し、次回の課題は「うしろ足をもう少しのばすようにしたい」を記入した。

全体のふり返りで「前よりうまくなった？」の問いに、小さく手を挙げていた。

2. 考察

(1) 本單元における教材化（技の絞り込み・学習カード・ICT）との本児の関わりについて

終始、一生懸命運動していた本児たちであり教師の全体指示をすぐに行動に移せる素直さ・話をしっかり聞けること等を持ち合わせているので、技を絞り込んだことは、焦点をあてて地道に練習できることいつながりよかったと思われる。最後の動画撮影時、子どもたちは今日の練習だけに意識が向いており、前時とのつながりや連続技・組み合わせ技ということにもう少し意識が向いていたら、動画撮影の効果がより明確になったと思われる。

(2) ゴールイメージに迫るための授業設計と教授行為について

「自分だけの美しい連続技・組み合わせ技を創り上げよう！」のゴールイメージに迫るために、前時とのつながりや本時の中での深まりが子どもたち自身もう少し感じられるとさらに成果が表れたような気がする。そのためには、全体指導でより明確な指示や説明により見通しをもたせてあげて、その上にグループやペアの関わりがあることで深い学び合いにつながるとと思われる。

教授行為については、M児・K児は、練習の後半で教師の個別指導があり、自身の技の達成状況を認めてもらい、ペアを見てあげる視点を再確認できる機会があった。熱心に練習した上に、教師に個別に認めてもらうことで、自信がついたのではないかと思わされる姿でありよかったと感じた。

(3) マット運動における「運動の楽しみ方を創り出している姿」について

自分で選んだ場で技の上達を目指して熱心に何回も何回も練習する姿、授業時間中、終始休まず練習したり確認したりする追究し続ける姿、ペアやグループの友だちと顔を見合わせて動画を確認したりめあてを確認し合ったりする姿は、マット運動における「運動の楽しみ方を作りだしている姿」であると考えられる。

1 子どもの様子

(1) 準備～課題把握

J児とA児はともに、道具を準備してから各チームでストレッチをする。その後サーキットの位置に整列する。サーキットでは、どちらもカエルの足打ちのところへ移動した。腰や足はそれほど高くは上がっていなかったが、足裏を2回ほどリズムよく打ちながら前進することで、腕で体を支持する感覚をつかんでいた。

全体での課題把握終了後、二人で本時の課題となる動きと練習方法について確認した。J児とA児は本時、後転を選択している。お互いのワークシートを見ながら、共通の課題である両手をしっかりマットにつけて押すことを確認し、本番マットで練習を開始した。



(2) 追究～連続技

H児も同様の練習をするということで、3人での追究がスタートする。何度か試技をするが、自分がやってペアがやってという繰り返りで、お互いに見合っていてアドバイスするという形では学習できていなかった。佐藤教諭からの「順番に見て、気づいた点をアドバイスし合おう。」という助言のあとは、ペアの試技を見るようになった。本番マットで何度か試技をしてお互いに見合うと、J児はA児がおしりを遠くに着けていないことに気付いた。A児はJ児が両手をマットに着いて足を引き寄せられていないことを確認した。お互いの課題を克服しようと、場を坂道マットに変えて、おしりを遠くに着く感覚やおしりが着くと同時に足を引き寄せる感覚を体感しようと考え移動した。

坂道マットでは、A児は赤玉をマットの中ほどの両サイドに置くことで、おしりを着く目標箇所をつくり、試技を繰り返した。J児が「もうちょっと奥に着くといいよ。」とアドバイスをすると、何度も試技をくり返し、おしりを遠くに着くことを意識して、勢いをつけてままスムーズに回転することができるようになってきた。J児もおしりを遠くに着く練習を繰り返すことで、勢いをつけてスムーズに回転していた。また、おしりが着くと同時に足を引き寄せることを意識しながら練習することで、両手で押すタイミングをつかみ、坂道マットでは、最後にきれいに立ち上がることができるようになってきた。



連続・組み合わせ技の撮影に取り組む時間になると、A児は後転と前転の組み合わせ技を行った。後転ではおしりを、前転では手を遠くに着くことを意識してスムーズに回転することができていた。N児は、後転の際、坂道マットとは違って、両手でマットを押すことがうまくいかず立ち上がる際にふらついてしまった。



(3) 振り返り

学習カードの振り返りには、J児は「次は、ちゃんと立ち上がる。最後に手で押せるようにする。」A児は「おしりは遠くに着けるようになったけれど、最後に手で押すところがうまくいかなかったから、次はそこを頑張りたい。」と記述していた。

2 考察

(1) 本単元における教材化（技の絞り込み・学習カード・ICT）との本児の関わりについて

本時、A児とJ児は、学習カードに記載されていた坂道マットでの練習に取り組んだ。学習カードに書いてあったポイント「おしりを遠くに着く」ことを意識して、赤玉を置いたところをおしりを着く目標にし、何度も試技を繰り返す姿が見られた。ポイントを意識しながらくり返し練習したり、アドバイスし合ったりすることで、スムーズに回転できるようになってきた。このことから、学習カードを活用し、自己の課題に合った練習を選択するだけでなく、より自身の課題に合った方法に変えて追究している姿とってよいのではないかと考える。

(2) ゴールイメージに迫るための授業設計と教授行為について

本時の振り返りで「おしりは遠くに着けるようになったけれど、最後に手で押すところがうまくいかなかった。」と記述があった。A児、J児ともに前転と後転を選択していて、それぞれの課題を全て達成できたわけではないが、技のレベルは最初の頃から比べると確実に向上してきている。扱う技を絞ったことは、有効であったと考える。

教授行為については、本時このグループについては教師の個別の指導はほとんどなかった。子どもたち同士、学習カードのポイントに立ち返ってアドバイスし合う姿は見られたものの、「おしりを遠くに着く」ことばかりに目を向けていてそれ以上の深まりは見られなかった。子どもたちだけでの学び合いには限界があると感じる。教師がそれぞれの場を何度も回って声をかけ、子どもと一緒に課題を明らかにしたり、疑問を即時に解決していったりすることも技の向上につながるのではないかと考える。また、子ども同士の学び合いを深めるためには、全体指導の際に外的なポイントやコツを押さえて全体共有していくことが大切だと考える。なかなか短時間でポイントやコツを押さえていくことは難しいため、単元の時間配分を検討することも必要だったかもしれない。

(3) マット運動における「運動の楽しみ方を創り出している姿」について

坂道マットで置いた赤玉を目安におしりの着く位置を互いに確認し合いながら、またはより遠くに着くことを競い合いながら試技を繰り返す姿は、とても楽しそうであった。外的なポイントを踏まえた上で、練習方法を確認し、ペアに動きを確認してもらいながら試行錯誤する姿は、マット運動における「運動の楽しみ方を創り出している姿」の一例とってよいのではないかと考える。

1. 子どもの様子

(1) 準備～課題把握

N児は、道具を準備してからチームでストレッチをする。開脚はとても開き柔らかい様子であった。その後サーキットの位置に整列する。1つ目はスーパーマンのところで並んでいたが、整列中に時間がきてしまい、次のところへ移動した。次の位置は倒立バタンの場へ整列した。振り上げ足をまっすぐ伸ばすことを意識して取り組む姿が見られた。

全体での課題把握終了後、ペアのR児と本時の課題となる動きと練習方法について確認した。N児とR児は本時側方倒立回転を選択している。R児がN児のワークシートを覗き込みながら、N児の本時の課題が最初の腕を振り下ろし、足を上げる部分と、最後の立つ局面であること、連取方法として、ゴムひもを用いた練習方法を行うことを確認した。



(2) 追究～連続技



S児とC児も同様の練習をするということで、4人での追究がスタートする。何度か試技をすると、N児は着手の位置が手前すぎるためゴムひもに足が引っかからないことがあった。R児は序盤から足先までピンと伸びた倒立経過の回転をすることができているが若干横にずれてしまう様子であった。S児は試技をする際にできるだけ高く紐を上げてもらうように指示を出し、後半の足を引っかけるように意識して試技をする様子が見られた。R児がまっすぐ回転できるようになると、そのあとすぐにN児も回転ながら、足をまっすぐ伸ばしながら回転する動きをつかもうとする様子が見られた。その後N児が試技をしようとする、紐を持っているS児が「もうちょい（始める位置が）前」と

声をかけるようになった。すると、練習の最初の方では、紐を前（ふり上げ足）の方に引っかけていたのが、後の足の方を引っかける練習となっていき、後半の足も伸び、勢いをつけて着地できるようになってきた。しばらく練習を繰り返したところで、紐のない状態で挑戦し始めた。R児は紐のない場でも足を伸ばした回転になっているが、N児とS児は前半の足が曲がってしまうような様相になった。iPadの使用が先生から促されると、さっそくC児が取りに行き撮って見始める。R児の試技を撮影し、視聴すると思わずN児から「じょうず」と声が漏れた。S児の試技をコマ送りで見ると、N児「スローだとわかりやすい。いいと思う」とつぶやいた。その後N児自身も自分の試技も撮ってもらい確認した。C児の試技を撮影し、見てみるとC児が「足が曲がってる」とつぶやいた。その後再度ゴムひもを持ち順番に練習に取り組んだ。

連続・組み合わせ技の撮影に取り組む時間になると、「待って後転できない」「後転やるの？」とN児がつぶやいた。N児は側方倒立回転と後転の組み合わせ技を希望していた。グループの中で順番を決めてN児は試技に取り組んだ。側方倒立回転は回転し切ったが、後転は体が伸びてしまい、スムーズに回転することができなかった。

(3) ふり返り

学習カードの振り返りには、側方倒立回転について「足を振り上げるところはうまく行ったけど伸ばせなかった」と記述した。また、次回の課題については、前時に扱っていた後転の学習カードを取り出し、お尻を遠くにつくことを課題にすると記述していた。

全体のふり返りの際、教師の「前よりうまくなった？」の問いに対しては、小さく手を挙げていた。

2. 考察

(1) 本単元における教材化（技の絞り込み・学習カード・ICT）との本児の関わりについて

本時、N児を中心としたグループは、学習カードに記載されていたゴムひもを使った追究に取り組んだ。学習カード上では、実際の使用方法などの図解がなかったが、子どもたちの使用の仕方を見ていると、前足（ふり上げ足）で紐をける子と、後の足でける子の姿が見られた。N児も「足を上げる部分」「最後の立つ部分」を課題とし、追究序盤は前足でけていたのが、S児の声がけもあり、中盤以降は後の足で引っかけている様子が見られたことから、学習カードを活用し、自己の課題に合った練習を選択するだけでなく、より自身の課題にあった方法に変えて追究している姿とってよいのではないかと考える。

また、このグループにはR児という「美しい側方倒立回転」で試技をする児童もいた。N児はR児の試技を見てから自分の試技を行ったり、iPadでとられたR児の姿を見たりして、外的に「美しい側方倒立回転」のイメージをつかむことができていただろう。そのイメージが原動力となり、本時の追究につながったと考える。そういった点からもICTの活用し、試技を撮影したことの効果があったといえる。

(2) ゴールイメージに迫るための授業設計と教授行為について

技の絞り込みにも関わってくるが、本時の振り返りでN児は「(足を)伸ばせなかった」との記述があった。また、前時の後転の学習についても課題を感じており、その姿が組み合わせ技撮影前やふり返りの様子からも見て取れた。N児の追究している様子を見ても、「後転」「側方倒立回転」の2つの技を追究するには時間が足りなかったといえる。本授業設計では、組み合わせ技で2つの技を選択した子は、1時間ずつの追究時間しかなかったため、その時間の確保できるように単元の時間配分を検討するか、そもそも扱う技を少なくするといった工夫が必要であったと考える。

教授行為については、本時このグループには教師の個別の指導はほとんどなかった。それだけ子どもたちが自律的に学習に取り組むことができていたという見方もできるが、より協働的な学習にしていくためにも、子どもたち1人1人がR児のような「美しい側方倒立回転」に迫る外的なポイントやコツをもっていることが必要だろう。そのためには、学習カードの見方・使い方の十分な理解を促す声かけや教師の直接的な働きかけが大切になると考える。また、教授行為について、「運動の出来栄えやコツの指導」に加え、「子どもたちのコツや感じといった思考をつなげる関わり」についても器械運動では大切になってくるのではないかと感じた。

(3) マット運動における「運動の楽しみ方を創り出している姿」について

考察(1)の、ゴムひもの使い方を変えて追究するN児の姿は、自己の課題に対して、練習方法を選択・工夫をし、技の上達を目指している姿であった。新たな技の習得のために外的なポイントを踏まえた上で、自身の課題を明確にもち、練習方法や自身の動きの感じを変えながら試行錯誤する姿は、マット運動における「運動の楽しみ方を創り出している姿」の一例とってよいのではないかと考える。

・重ねたマットの場で練習を始める。

C1「この辺かな？」(はじめの立ち位置を確認) → 後転の後「もう少し手前からか」

C2「ちょっと怖いな」何回か練習し「目が回った。ちょっと休憩」といって座っている。

(この場で練習しているのは2人しかいないため、すぐに自分の順番になる。何度も繰り返して重ねたマットの場で練習する)

・先生が来て声をかける

T「両手でマットを押せているか確認してみて」「どんな押し方してるかな？」

C1「もうちょい早めに押した方がいいかな」

T「今の手のつき方、手の形とかはどう？iPad を使ってもいいよ」

C2「しっかり押せてる気がする」

→何のために設定された場なのかがわかっていなかったため、はじめはただひたすら繰り返し後転をしていた2人だったが、先生の助言により、重ねたマットの場での練習目的が明確になり、「手の押し」を意識した練習にかわった瞬間である。

手の押しを意識した練習を繰り返した後、エバーマットの場へ移動し試してみるが、どう練習するのか2人で悩んでいた。

C1がC2へエバーマットでお尻を遠くにつく練習を教える。その後重ねたマットの場へ戻り試すが、お尻の位置は変わっていない。

C2「もうちょっと早く手で押さなくちゃ」

再びエバーマットへ。

C2「(このやり方で)あってるかな？先生に聞いてこよう。」と言って、先生を探しに行く。

C2「エバーマットの使い方どうやるの？」

T「できるだけお尻を遠くにつくように」と言ってやってみせる。

C1がやってみる。T「そうそう」

C2も何度かやってみる。エバーマットの上に立って試したり、床に立って試したりしていた。

班ごとの連続技で、C2は側転2回+後転を何度か試す。

最後の全体での振り返りでは

C2「前よりよくなった。」

T「どんな感じで上手くいったのか教えて」

C2「最後にドンという感じでやった。」

T「強く突き放す感じ？」

考察

陽人さんは、本時2つの場で後転の練習をし、「手でしっかり押す」と「お尻を遠くにつく」ことを意識して取り組んでいました。お尻を遠くにつくことはまだできていませんでしたが、手で押す感覚は最後の感想で発表したとおり、自分でも手応えを感じていました。これは、①意識して練習できる場の工夫があった②教師が適切な

タイミングで声をかけ、「手で押す」ことを焦点化した③ペアの友達との相性がよく、練習を楽しみながらできた④先生が本児の成長を捉え、最後に計画的に指名をし、つかんだ感覚を言葉で表現させた等のよさがあったからだと思います。

もちろん、本時によさに至るまでには、前時までのドリル練習や先生の言葉がけ、学習カード等々の手立てがあったからこそだと思います。

本時、練習の段階で平らなマットで試すことがあればさらによかったと思います。できるようになったかを平らなマットでやってみて、友達にも評価してもらい、また練習用の場へ新たに課題をもって行く、そのような学習ができてくると、より自分の課題を意識して取り組めたように思います。場があるから何となくそこで練習しているのではなく、自分の課題にあった場を選んで練習できるといいです。また、何のためにその課題を設定しているのが明確になるといいです。「お尻を遠くにつく」のは回転力をつけるため、勢いをつけるためです。後転では頭が最後に邪魔になり、そこで回転力が落ちてしまいます。「手でしっかり押す」ことで頭の抜けがよくなり、なめらかな回転になります。なぜそれが大切なのかを意識できると練習へ向かう姿勢も変わってくると思います。さらに「お尻を遠く」や「手で強くおす」は後転の後の発展技に移行するために大切なポイントです。なんとか後転はできても、開脚後転や後転倒立などは全然できる気配がない児童がいると思いますが、ここに原因があります。後転のコツを習得することが次の技へ発展するために必要不可欠です。技の系統性を考えて課題を設定していくことが大事です。そういう意味で「大きな前転」を取り上げているのはいいいと思います。大きな前転ができれば回転力があり、開脚前転や伸膝前転へ発展します。

研究グループの先生方、授業者の先生、お疲れ様でした。

何よりも、子どもたちが生き生きと運動に取り組んでいる姿が素敵でした。直向きに後転を練習し続けた陽人さんと周さん。運動に真摯に取り組んでいる2人から、たくさんのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。

令和4年度上伊那体育研究会 学習指導研究会

授業研究会 記録

授業者 佐藤 瑠郁 先生

<授業者反省>

○良かった点

- ・子どもたちが運動に積極的に取り組む時間は取れた。
- ・分析できている子がいた、お互いに子どもたち同士の学び合いができていた

▲課題

- ・反省点、場の設定、場所の迷いがあった。早い段階で、場づくりをしたかった。
- ・iPadの使い方、iPadを使う意味をしっかりと確認するべきだった。
- ・どこを見てほしい、どこでみてほしいかなど、子どもたち同士の話し合いの観点を明確にしたかった。
- ・飛び前転は入れないことを途中で変更している。

<質問>

辰野西小 伊藤：子どもたちがとらえる、美しさ、教師の考える美しさとは？

授業者 佐藤：オリエンテーション第一時、教師の師範と、子どもの実態のビデオ視聴の比較から、美しさを抑えてきている。これまでの師範の映像のストックも活用している。

箕輪北小 久保田：子どもたちの中で、ドリルやサーキットをどのような意味でとらえていたか。

授業者 佐藤：それぞれのサーキットの場所で、どんな技に伝わるのかは、ドリルを入れる時点で説明している。

岩田T：良く動ける子だと思った。4年までの学習経験で分かるところがあれば。3つの技で、ポイントとして抑えたところはどこか。

授業者 佐藤：学習経験に関しては、いくつかの技を取り組んで、連続技を行ったというのは聞いている。ハンドスプリングの技などもやりたい子はやっていたようだ。前転については手を遠くにつく、遠くについて、ピョーンと飛ぶポイントは大事にした。後転はおしりを遠くにつくこと。倒立については、肩の上にお尻と足が乗る感覚を大事に考えた。壁倒立については半分以上の子が、できていたと思う。

岩田T：中学年までに、壁倒立をしないと、20%くらいしかできない。今までの積み上げがあったと思う。技能レベルは高いと思った。

<教材化の部分 扱う技を三つに絞ったこと、学習カード、ICT機器の活用について>

辰野西小 伊藤：側方倒立回転の原田さん。その場で練習を続ける姿がもったいない。目標とする動画などがあると、新たな課題も見つけやすいと思った。後転の課題を確認していたが、もっと技は絞ってもよかったかと思う。美しいにこだわるのであれば、理想となる姿にまでこだわるといいと思った。手を挙げて始める子がいたので、初めから終わりまでしっかり意識してできるといいと思った。

西箕輪中 宮原：そうし君たちの大きな前転を見た。前転で足が揃わなかったが、ゆうまくんの動画を見てイメージしたのか、そこから足が揃ってよかった。「ピョーン」と飛ぶとは、あまり遠くの飛んでも逆に低くつぶれてしまうので、遠くに飛ぶだけではなく、しっかりと地面をけて腰の高さを出すことが

大事だと思う。そんな点も意識してもらえるといい。

西箕輪中 垣内：小5の技能の高さに驚いた。腰の高さ、プラス膝を伸ばすところも大切かと思った。「フワッと」や「キュッ」というような、擬音語なども授業の中で出てくるといいと思った。そういう点が子どもたち同士で共通理解ができるとより話し合いが活発になると思う。膝を伸ばすという点はその他の発展技にもつながるのではないかと思う。

箕輪北小 久保田：子どもたちが大事にする技のポイントをどうとらえていたか、そこがはっきりするとよかったと思う。後転をしていた子どもたち、「両手をついてマットに立つ練習」を今日の課題と据えていた。教師が大事に考える技のポイントの視点と少しずれがあったと思う。技のポイントが抑えられていたらいいと思う。

東部中 東海林：大きな前転の様子をiPadで撮影していた。途中で動画を消してしまったが、その後成功している。どこが成功のきっかけになったか。それがはっきりするとよかった。学習カードなどに、友だちとのコミュニケーションの内容を記録したり、位置づけたりできるといいと思った。

南箕輪小 清水：しゅうさん、はるとさんの後転を見ていた。繰り返し1時間中練習をしていた。先生が来て、手を強く押すアドバイスをしてくれたので、そこから手の付き方が強くなった。エバーマットのところでも教師のアドバイスで意識して練習していたと思う。そもそもその練習がその子たちにとって必要であったかは疑問。そこに必要感があったかどうか。見てほしいところ、上手くしたいところをはっきりさせて学習に臨めるとさらに良いと思う。

新山小 大内：伊藤さん、繰り返し前転を練習する姿があった。技のポイントをまとめた学習カードや場の設定がよかったと思う。大きな前転のポイントがカードに書かれていたので、もう少しカードに戻れる声がけもあってもよかったと思う。単元の終盤になってきているので連続技につながる声掛けもあってもよかったかもしれない。

体育科学習指導案



期 日 令和4年11月8日(火)

単元名 「ハーフコートシングルス 前後に揺さぶるバドミントン」(ネット型 バドミントン)

授業学級 2年3組 (男子15名 女子13名 計28名)

授業者 高原大誠

飯島町立飯島中学校 体育科

1 単元名「ハーフコートシングルス 前後に揺さぶるバドミントン」(ネット型 バドミントン)

2 運動の捉えと子どもの実態

(1) バドミントンの中心のおもしろさ

バドミントンは、1対1や2対2でネットを挟んで相手と向かい合い、ラケットを操作して様々な打球を打ち、いかに相手コートに落とすか、そして得点を重ねていくかを競い合う「ネット型」の運動であり、攻守の切り替えが非常に速いという特徴がある。バドミントンは、色々なストロークを使ってラリーを続けたり、相手を惑わす打球(緩急をつけた打球や相手を前後左右に揺さぶる打球)を打って得点を競い合ったりするおもしろさがある。また、相手の特徴を分析して作戦を考えたり、対戦した相手や自分の得意なストロークを軸に作戦を考えたりするなどのおもしろさもある。

(2) 生徒の実態

- ・中学校生活で初めてバドミントンを実施する。1 学年時に、ネット型バレーボール(ワンキャッチバレー)を行った経験がある。ワンキャッチバレーボールでは、ラストボールを返すのに人任せにしてしまうことがあった。
- ・比較的まじめで静かな生徒が多い。1 学期に行ったソフトボールでは男女での話し合いに躊躇する場面が見られたが活動になると良い関わりも見られた。
- ・発言する生徒は偏っており、活動全体に発信することを苦手としている生徒も見られる。教師の指示には従うがコミュニケーションが取れず、教師を介して会話をしようとする姿もある。また、相手の立場に立って考えようとする事ができる生徒と苦手な生徒がいる。グループを変更したり、様々な生徒と関わりを持てるようにしたりしてきたが、グループ内で関われることはまだ難しい姿があると感じる。

(3) 中心のおもしろさに迫るために(教材化の方向)

[1] 場の工夫

- プレイするコートを半分して、動く範囲を狭めることによって、どのように攻防したらいいかわからない生徒も、前後のゆさぶりを意識した攻防ができるようになるだろう。
- 単元の前半は、ネットを2mにすることでスマッシュが打ちづらくなり、スマッシュに頼らずに空いたスペースを狙う攻防が表れやすくなるだろう。

[2] ルールの工夫

- 単元の前半に2mで試合を行う際に、相手の正面にシャトルを返してしまう生徒もいるだろう。後方にシャトルを落としたら2点前や真ん中は、1点とすると前後の動きを意識できるようになるだろう。
- 単元の後半、1.5mネットにした際に、力強いスマッシュばかりに意識が向いてしまう生徒もいるだろう。ルールを変更し(前2点 真ん中1点 後ろ2点のゲームルール)前後の点数を高く設定すると空間を意識しやすくなるだろう。(体や
- サービスが入らない、狙いすぎてフォルトになってしまう生徒もいるだろう。サービスルールを変更し、2回打てるようにするとラリーが続きやすく、スペースを狙うサービスが打てるようになるだろう。

[3] 学習形態の工夫

- 4.5人1組のチームにして声かけ・アドバイスを行うことで、作戦を立てることや攻防の判断が難しい生徒も相手のコートの空間をねらったショットを打てるようになるだろう。
- シャトルがどうしてコート内に落ちてしまうのか、なぜ相手のコートにシャトルが落ちないかわからない生徒もいるだろう。客観的に自分の試合を分析できるようにするために、動画を撮影しや話し合いを通して自己の課題を発見し、解決に向けて練習を工夫することができるようになるだろう。
- ハイクリアが遠くに飛ばずに相手を後方に下げられずに、悩む生徒もいるだろう。ドリルとして、ハイクリアの素

振り、ホームポジションから後ろに下がる動き、そこから前に入る動きのフットワーク、ハイクリアドリルを毎回入れることによってハイクリアを飛ばし後方に相手を下げることができるだろう。

○新聞紙を投げる動きや手ぬぐいでスナップの練習や体育館のギャラリーから吊されたひもを打ち打点を高くする感覚が身につくだろう。

○動画撮影(6~8時間目)で前後の動きが見られた動きや空いているスペースを発見し、良かった点や改善点を発見するために、試合を撮影し自分の動きを把握したり、作戦を立てたりする。

[4] 取り組んだメニューの工夫

○ハイクリア(2~4時間目)

- ・打点の位置を確かめるために、ステージから吊る下げたスズランテープを打つ。
- ・腕をまっすぐ上に出すために、新聞紙を棒状にしたものをハイクリアの形で投げた。
- ・同じコート内から手でシャトルを投げ、相手コート後方まで打つ。
- ・手ぬぐいを使いスナップ練習。

○7,8時間目の課題別練習

- ・コート前後の動きの練習。(相手にドライブやハイクリアを同じスペースに打ってしまう生徒)
- ・コート番号を仲間に伝えてもらいながら、相手のコートのスペースにシャトルを打っていく練習。(空いているスペースを意識しながら試合に取り組んでいる生徒)

3 単元の目標

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方を理解するとともに、狙った空間にシャトルを打ち込んだり、空いている場所を攻撃したり、空いている場所を作りだして攻撃したりするなど、自己や相手の特徴を踏まえた作戦を立てゲームを展開することができる。	攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができる。	球技に積極的に取り組むとともに、フェアプレイを守ろうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとするなど、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとするなど、仲間の学習を援助しようとするなどや、健康・安全に気を配ることができる。

4 評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ア ラケットの中心付近でシャトルを捉えることができる。 イ シャトルを返す方向にラケット面を向けて打つことができる。 ウ 相手側のコートの空いた場所にシャトルを返すことができる。 エ 相手を揺さぶる攻撃を組み立てる事ができる。	オ ポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えることができる。 カ 仲間との違いを踏まえて、練習やゲームを行う方法を話し合うことができる。 キ 提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選ぶことができる。	ク 球技の学習に積極的に取り組もうとすることができる。 ケ マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとすることができる。 コ 作戦などについての話し合いに参加しようとするすることができる。

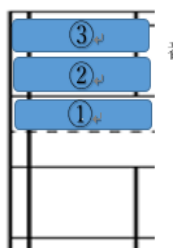
5 ゴールイメージ

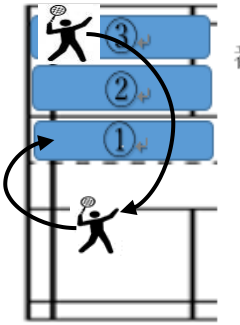
ショットを組み合わせ、対戦相手を前後に揺さぶり、空いている場所を狙った攻防をしよう！

6 単元計画

時	1	2	3	4	5	6	7	⑧本時	9	10	
ねらい	・バドミントンの特性を理解し、学習の意通しを立てよう。	相手が打ちづらいサーブを打とう	コート後方に、ショットを打とう		チャンスが来たら、鋭いショットを打とう (1.5m ネット)	鋭いショットをたれないためにどうするか	課題別練習	課題別練習	今まで学んだことをいかしてリーグ戦をしよう	今まで学んだことをいかしてリーグ戦をしよう	
活動内容	出会い約束イメージ	サーブ基本技術	ハイクリア基本技術		前に落とす、狙うショットの基本技術	人のいない場所へ攻撃	個人課題練習	個人課題練習	リーグ戦	リーグ戦まとめ	
学習の流れ	5	授業の約束	本時の課題			・準備運動・基本ドリル					
	10	映像によるイメージ共有	ハイクリア基本技術	ハイクリア基本技術	ハイクリア基本技術	・挨拶・本時の課題の確認					
	15					コート前方を狙うショットの基本技術	前後の動き	個人課題練習	個人課題練習	リーグ戦	リーグ戦まとめ
	20										
	25	ゴールイメージの設定	試しのゲーム	ゲーム							
	30										
	35										
40											
45											
50	本質の課題の共有	振り返り・片付け									
評価計画	知技 愚判表 学人	アイ オ ク	アイ オ ク	アイ オ ク	ウ キ クケ	ウ カ クケ	エ カキ コ	ウ オカ コ	エ ケ	エ ケ	

時間	学習問題	学習課題*振り返り
1時間 目	オリエンテーション 動画を見て、動きの違いを見つけよう!	学習の進め方・フットワーク・基本ドリル・グループ発表・ゴールイメージの設定 スペースを狙った攻撃が有効であることに気づく *後ろに打つことができればスペースができる *後ろと前に打ち分けられれば得点できそう
2時間 目	ネットの立て方 フットワーク練習 ハイクリアフットワーク練習 試しのゲーム	後方のショットを打てないとスペースができない 試しのゲームで、自分の課題をつかもう。 *遠くに飛ばすのが難しい。 *試合でハイクリアを使ってみたらうまくできた。
中位課題：ハイクリアでコート後方までシャトルを飛ばせるようになる。		
3時間 目	ハイクリア基本技術	まだまだ、後ろに飛ばすことは、難しい。 ハイクリアの基本技術を意識してコート後方に、ショットを打とう。 *体をひねって打つとうまく飛んだ。
4時間 目		*ムチのように打つとうまく飛んだ。 試合ルール 得点 ①②→1点 ③ →2点 サービス 打ち方は自由。②③のコートに入れる。



5時間 目	後方だけではなく、前のスペースにも打ってみよう。 (1.5m ネット)	前に空いたスペースにショットを飛ばせば得点できそう。 技能ポイントを意識しながらグループ内でドロップやヘアピンを練習しよう。 *前のスペースにショットを打つことができた。 *真ん中にボールがくると鋭いショットが打ちやすく、点も取りやすい。 中位課題：ドロップやヘアピンを使って前のスペースにショットを打って相手を揺さぶろう。
6時間 目	有効な攻撃方法を組み立てよう。	学習カードを使って自分の得意な得点パターンを考え、ゲームで試してみよう。 *得点パターン通りのチャンスボールが飛んできたときに、鋭いショットがうてた。 *ドライブをドライブ以外の緩いショットで返せた。
7時間 目	個人課題別練習	課題別練習の例を参考にして、自分の課題に沿った練習をしよう *練習した課題を試合で試すことができた *ハイクリアで相手後方に下げたら相手からチャンスショットが来たときに、鋭いショットが打てた。 <紹介する練習メニュー> ・チームメイトに、言われた番号の場所に打つ。 ・空いている場所に打ち込む練習。 ・攻撃パターン 例) ハイクリア→チャンスボール→スマッシュ、プッシュ ドロップ→チャンスボール→ハイクリア 
		中位課題：課題別練習の例を参考にしたり、ゲームの動画を見て分析したりして、試合で空いているスペースを見つけたりする。
8時間 目 本時	個人課題別練習	前回のゲームを分析して、さらに自分の攻撃パターンを磨く練習をしよう。 <紹介する練習メニュー> ・攻撃パターン 例) ハイクリア→スマッシュ→ドロップ、クリア(後方へ) ドロップ→ヘアピン→クリア(クリア) *前回自分の攻撃パターンがわかり、それに応じた課題練習をしたことで相手を前後に揺さぶることができた。
9, 10 時間目	リーグ戦をしよう まとめ	今まで学んだことを生かして試合をしよう。

7 本時案

(1) 主眼

前後の揺さぶりが試合を優位に進めることを実感してきた生徒たちが、グループで課題を共有し、攻撃パターンをイメージした練習をしたり、ゲーム後に動画を見ながらアドバイスし合ったりするを通して、より前後の揺さぶりを意識したショットや、チャンスボールを得点できるショットを打つようになる。

(2) 本時の位置(10時間中8時間)

前時:グループ内で練習例を参考に課題別練習を行い、リーグ戦をした。

次時:各自の攻撃パターンを見直したり、さらに高めたりする課題解決の練習をし、最終リーグ戦を行う。

(3) 指導上の注意点

○対戦相手と人数が合わない場合には、振り返りの場面で、対戦相手とアドバイスし合うようにする。できればそこに教師も参加するようにする。

○コートに限りがあるので、課題別練習がスムーズにいくよう、場所や道具の準備や練習内容の時間配分をしておく。

(4) 展開

段階	学習活動	予想される生徒の姿	指導 支援	時間
はじめ	○用具の準備 ○ホームコートで準備体操、基本ドリル ○あいさつ ○今日の課題確認	・素早く準備して、ドリルの時間を確保しよう。 ・シャトルがなかなか入らない。 ・前時に打てなかったフライトを練習しよう。 ・これまで学んだ技能ポイントを意識してドリルをやろう。 ・前回の前後の動きが少なく、ドライブ合戦になってしまった。 ・①のコートに打つことが難しい。 ・前後の空間を意識できた。	○声が出ているチームを認めたり、基本の動きができてきているかを見たりする。 ○ドリルを行っている際に、学習してきたポイントを伝える。 ○前回行った試合は、ゴールイメージにある「ショットを組み合わせて、対戦相手を前後に揺さぶり、空いている場所を狙った攻防をしよう」に近づいていた？と質問をする。	10
《学習課題》 前時に見つけた自分の攻撃パターンを中心に練習し、試合で使ってみよう				
なか	行ってきた練習課題別にチーム内の同じ課題の人と選んで行う。	リア、前後の振り分け、鋭いショットの練習を行おう。 ・自分なりの攻撃パターンができたので、練習で繰り返しやってみよう。	しながら行うように助言する。 ・ドライブ合戦になっている生徒→前後交互に打つ練習 ・相手コートのスペースを意識している生徒→コート番号を仲間に言ってもらいながらその場所に打つ練習	15
	○試合 各チーム総当たり戦 4人から5人 1vs4 2試合 3vs5 2試合 2vs6 2試合 1vs6 2試合 2vs3 2試合 4vs5 2試合 試合時間3分 作戦タイム 1.5分	・鋭いショットでうまく点を取ることができた。 ・相手を動かし、スペースを作ることが出来た。	○相手の空いているスペースを狙った意識している攻撃をクラス全体に伝える。 ○チャンスボールを与えない動きと、チャンスボールがきたら鋭いショットを打つように攻撃する。 ○前後の動きのある攻撃に対して、クラスに賞賛する。	20
おわり	○振り返り	・人がいないスペースを見つけて攻撃することができた。 ・思った場所にシャトルが飛ぶと面白い。 ・前回よりも、空いているスペースを意識して攻撃することができた。 ・打ちづらいショットを打つことができた。	○スペースをうまく攻撃ができなかったチームを中心にミーティングを見て、成果と課題を確認する。必要があれば助言をする。 ○全体の場で、今日の成果を共有する。 ○次時は、今回のように相手コートの空いているスペースを意識した攻撃を行いながらリーグ戦を行うことを伝える。 ◆相手側のコートの空いた場所にシャトルを返すことができる。 ◆ウ	5

授業の観点

- ①今回の教材(ルール、ハーフコート、必要なショット)は、生徒が前後の揺さぶりを中心にシャトルの落とし合いを楽しむのに有効だったか。
- ②攻撃パターンをイメージした練習をしたり、ゲームの振り返りの場面で良かったことや改善点を伝え合ったりしたことは、試合をより優位にすすめるうえで有効だったか。

8 授業者の振り返り

(1)教材化について

コートを半分にしたこと、コート①②③に分割したことは教材としては良かった。得点をエリア①③は2点にしたことは、あまり生徒の必要感ないと感じた。ハイクリア技能習得のための2mネットは、スマッシュが無くなりハイクリアの軌道ができたが、1.5mネットになった際は、軌道がドライブになってしまったので、1.5mネットになった時間にもう一度確認するべきだった。サービスは2回まで打ってよいルールは、時間がかかってしまう一方、うまくいかない生徒にはチャンスがあり良かった。オリエンテーションで見せた参考動画は、単元の中盤にもう1度確認すると、さらにゴールイメージに近づくと感じた。

(2) iPad 撮影について

課題に対しての振り返り資料として、撮影した動画を見ながら話し合いを行ったが、観点が不十分だったので生徒達の話合いがうまくいかなかった。動画を見る必要感も無かったのではと思う。試合間に動画を見るのが良かったか。撮影場所、自分の打った場所や軌道が見えるように正面に配置したが、打った軌道が見やすかったように思う。

(3) バドミントンにおける「運動の楽しみ方を創り出している姿」について

ピンクチームの様子から試合を見ているチームメイトから「今だ!3番!」と声をかけるなど、コート外から仲間に貢献しようとする姿が見られた。また、青チームの様子からハイクリアで相手を後方に下げた後に意図的にドロップを打つ場面が見られた。ドロップが決まることは少なかったものの、見事に決まると大きな盛り上がりを見せた。これらのように、個人で行う運動ではあるが、自分がプレイするだけでなく、ゲーム中にアドバイスをして仲間の力になっている場面や、ゴールイメージにもある前後の揺さぶりの特にドロップを決めた時の歓声は、バドミントンにおける「運動の楽しみ方を創り出している姿」と言って良いのではないかと考える。

(4) 全体を通して

単元全体を通して、ハイクリアを4時間かけて行ったことは最終の基本技能向上につながった。しかし、10時間しかない中で前のショットの技能は追いつかなかったように感じる。ドリルで行った手ぬぐい、新聞紙、スズラン打ち、ハイクリアなどは有効だった。また、動画で確認することが難しかったため、岩田先生が言われていたスプリットシートが試合間に動画を見る事で必要感が出たのではないかと思う。

学指研を通して、改めて生徒が振り返りたくなる手立てが必要だと感じた。動画を見たりチーム対抗戦をしたりする中で、なぜこうなるのかをじっくり考えてしまう、そんな授業展開や学習カードや作戦タイムが取れるように授業をつくっていくことが大切だと感じた。また、授業の後半の振り返りの際に、生徒たちの意見をうまくまとめることができなかったことが反省。自分自身を見つめ直すいい機会となった。授業者という機会を頂き、ありがとうございました。

9 各チームの記録・分析

(1) 2班 ピンク色 5番の生徒

<前後の揺さぶりについて>

- ・全体を通しては、8割程度が2番エリアへのショット。
- ・得点の決まったショットでは、勝った試合は3番エリアへのショットで相手が空振りするパターンと、2番エリアへのドライブのショットで得点を重ねている。負けた試合では、2番エリアへのショットで相手が返せなかったものが多数と、終盤で3回、3番エリアへのショットで連続得点している。

<その他・アドバイスの様子など>

- ・負けた試合ではあったが、味方の男子が「今だ!3番!」と声をかけ、本人も分かっており決まったショットがあり、非常に嬉しそうにしていた。

(2) 2班 ピンク色 1番の生徒

<前後の揺さぶりについて>

- ・ラリーは短い、自サーブのリターンが2番エリアへのショットだった場合、ほぼ1番か3番へ返している。そして変化をつけたところで得点をしている。

(3) 2班 ピンク色 3番の生徒

<前後の揺さぶりについて>

- ・どのラリーでも、3番または1番エリアへのショットを混ぜていた。

<まとめ>

- ・分析した試合では、ドロップショットが1回もなかった。また、ヘアピンもなかった。
- ・エリアで見ると、2から3や、2から1はあるが、1から3や3から1はほぼなかった。
- ・得点した場面で見ると、揺さぶられて間に合わずというものはほとんどなく、ショットミスや空振りがほとんどであった。

(4) 1班 黒色 1番の生徒

<前後の揺さぶりについて>

- ・相手の位置や相手からの返球の質に応じて前をねらっている様子が見られた。
- ・ドライブの応酬が頻繁に起こっていたので、奥をねらったフライトもドライブ気味になっていたが、奥まで届かせようとして打っている様子が見られた。

<攻撃パターン・今日の課題について>

- ・基本的には相手のドライブに応じて、ドライブを返球するような場面が多かったが、相手の乱れやチャンス時には、スマッシュやドロップを使おうとする様子が見られた。授業の課題では、「自分の攻撃パターンを試合で使ってみよう」となっていたが、自己課題として「打ち合いになった時の打開策を考えたい」としていたので、結果的に自分の考えた攻撃パターンに持ち込もうとするというよりは、相手の状況に応じた攻撃をするということを意識していた。それが功を奏していたように思う。したがって「攻撃パターンの設定」は無かった方が良かったかもしれない。「相手の位置や相手からの攻撃に応じた返球で得点しよう」などのようにしておく、前後の揺さぶりがより見られるようなゲームになったのではないだろうか。

<その他・アドバイスの様子など>

- ・動画の確認をする姿は見られたが、あまり話が弾んでいるようには見えなかった。観点がもっと明確に定まっていた方が良かったかもしれない。自分自身が意識したことができていたかできていなかったか、ということの確認はしていたように思う。

(5) 1班 黒色 5番の生徒

<前後の揺さぶりについて>

- ・基本的にドライブ中心の打ち返しの中で、奥まで飛ばそうと強めに打っている姿が見られた。ただし、フライトの軌跡に差をつけることはできていなかった。
- ・前をねらったフライトが少なかった。相手からドライブを返されると、反射的に強く打ち返してしまっている様子が見られた。

<攻撃パターン・今日の課題について>

- ・ホームポジションから一度動かされると、戻る意識があまりなかったように見える。戻る意識よりも「ドライブ→ドライブ→ドロップ(うろ覚え)」の攻撃パターンを成功させようとする意識の方が強かったか。これも結局、思うように打ち返

せなかったようである。相手からの攻撃への対応で精一杯だったように思える。時折余裕があると、前をねらったフライトを返球できていた。

<その他・アドバイスの様子など>

・攻撃パターンが上手くいかなかったことを気にしていた。動画を見て何か話してはいたが、上手くいかなかったという事実を確認するだけの時間になっていたように思う。

(6) 4班 青色 5番の生徒の様子

<前後の揺さぶりについて>

・前後に揺さぶる意識は高かった。相手がクリアで打ってきたときは、意識的にドロップで返すことが多かった。ヘアピンとまではいなくとも、ネット際に落とそうとする様子も後半あった。
・最後はロングハイサーブで得点した。

<その他・アドバイスの様子など>

・クリアで相手を後方にやっておいてからドロップが決まったときは、周りがとても盛り上がった。
・動画を観たり試合の様子を見たりする中で、アドバイスはあまり見られなかった。

10 授業研究会記録

(1) 今回の教材は生徒が前後の揺さぶりを中心にシャトルの落としあいを楽しむのに有効だったか。

(ルール、ハーフコート、ショットなど)

- ・前後の揺さぶりで盛り上がる姿があった。クリアで奥につけて手前を攻めていた。それに対してチームメイトも盛り上がっていた。
- ・周りの声がかげも前後を意識していた。必要なショットの練習はされていたが、それを拾うレシーブの技能もあると良いのでは。レシーブ難しいが、やり方を伝える程度はしてもよかったのでは。また、前後の揺さぶりに特化するのであれば、スマッシュなしでもよかったかも。
- ・初めに質問…単元の中で参考動画を見たり、また生徒たちの試合の中で良いプレイを全体で提示したり確認することはあったか。→していない。試合の感想は、2番エリアでの打ち合いが多い印象。シャトルの軌跡のイメージが生徒にあったか。3番に打ってはいるが、ハイクリアよりドライブ性のものが多かった。そのイメージを持たせるために、途中で見ると良かった。サーブを2番に打ち返すことが多かった。山なりの3番エリアからヘアピンで1番エリアの、まさに崩されたイメージを持てると、さらに良かったのでは。
- ・相手に「ナイス」の声をかけている姿があった。また、その生徒の振り返りには、相手の良かったプレイについて書いてあり、相手から学ぶ姿があり、良かった。

(2) 攻撃パターンをイメージした練習をしたり、ゲームの振り返りの場面で良かったことや改善点を伝え合ったりしたことは、試合をより優位にすすめるうえで有効だったか。

- ・練習時、今日の課題をヘアピンにしていた生徒の相手の生徒が、奥に打ってしまっていた。やり方の工夫が大切。約束練習も良いのでは。振り返りで、ビデオを判定用として使用していた。動画の見る視点のイメージを共有できると良かった。
- ・自分の攻撃パターンはイメージを持っていたが、実際うまく行かなかったと振り返っていた生徒。動画を見返す時に言葉少なめに「いいんじゃないかなあ」「いいような気がする」と自信のない様子があった。仲間同士でプレイについて試合中に声をかけ合うことがあると、動画を見返す時につながるのでは。
- ・動画を見る必要感が生徒達にあったのか。ゲームの途中で見ると良かったかも。試合後に見るのでは、次の試合では相手が変わるので、見たことを反映しづらい。試合途中であればその試合に直接影響してくるので、必要感に繋がるのでは。振り返りより、狙いを絞って行うことの有効性を感じた。

- ・動画をうまく使えていなかった。紙のゲーム記録もよかったかも。
- ・試合後のアドバイスで、動画を使うよりも、見ての感想を伝えている様子があった。
- ・ピンクで生徒同士の声かけがあった。勝敗を気にする様子があり、そこから互いに必要感を持ってアドバイスをしていた。グループ活動の有効性を感じた。試合中のアドバイスが一番伝わる。それを持って動画を見られると良い。
- ・本時の課題で「自分の攻撃パターン」とあったが、相手の動きに合わせるところもあるのでは。それによって上手くいっていない生徒もいたのでは。そうすると、本時の課題と、現実で起きているところにズレがあったといえる。その調整ができると、さらに良かったのでは。

11 岩田先生からのご指導

まず全体的に技能は高かった。ラケットにシャトルが当たらない生徒がいなかった。高原先生の普段の授業への取り組みが良かったのではないかと感じる。教材観もシングルスにしたことと、コートを半分にして意思決定を前後のスペースにしたことなどが良かった。ゲームはドロップの応酬になるとさらに面白さが増す。まだ初めての単元ということで前に落としてやろうという意識が鮮明ではなく、2番エリアのラリーが多かった。やはり後方へ飛ばすことができることが大切。一番面白いところ、エッセンスにできるだけ早く子供たちを連れていきたい。ピンクチームのようにドロップが決まると盛り上がるので、ドロップの練習方法としてはネットを挟んでお互いに2mぐらいの距離に近づき、優しく打ち合うことでドロップ感触がつかめてくる。その運動の楽しさへ誘い込みをもう少し強烈にやると良かった。

今日一番話をしたかったのはハイクリアについて。オーバーハンドクリアは難しく、今日の授業で理想のオーバーハンドクリアができていた生徒は1人。実はボール投げの技能とオーバーハンドクリアの技能は身体知が類縁している。今回の教材の肝であるハイクリアで「鋭角引き」というのがあるが、これを「弓引き反転ムチ動作」と名付けた。これは大きく手首をテイクバックすることが大切。肘を引くためには腕の構造上、手首をクローズしておかなければ下がらない。手首を弛緩させてテイクバックして反転させてスナップを利かせられるかがポイント。今の子供たちはこの動きが苦手。野球のグローブに一人でスナップを利かせてボールを何度も投げ入れる動きはとても良い練習。ヨーヨーやメンコ、川の水切りの動きも似ている。今こういう遊びの動きが無くなってしまった。また、このオーバーハンドクリアの動きは説明しただけではできるようにならない。バドミントンのオーバーハンドクリアも状況に合わせて動くオープンスキルであることが要因の一つ。今の子供たちはボールキャッチも難しい。長い軌道になるほど軌道を予測できない。だから素振りでも良い動作ができていても実際はそうはならない。さらにスマッシュまで身に着けると考えると2年間にわたり単元を構成したい。また特に、動いて向かってくる対象物との距離感をつかむためにもボール遊びを特に小学校の低学年で多く経験させてあげたい。

今回のデータはラリーの全てではなく、最後の得点のところだけでも取ると、ゲームが終わった時に「もっと後ろを狙おう」などの話ができるのではないか。データをパソコンに打ち込むとエリア別に〇%と出るソフトもある。どこを切り取ってデータを取ったらフィードバックになるのかを考え、話し合いたくなっちゃうゲーム記録を取りましょう。また、それが思考力・判断力・表現力の育成にフィットする授業に近づくことにもつながる。

研究全体のまとめ

研究部

令和4年度は、「全ての子どもが、運動の中心なおもしろさを十分に味わいながら、自ら運動の楽しみ方を創り出していく体育学習～子どもとともにめざす授業のゴールイメージの在り方に焦点を当てて～」を研究テーマに据え、小学校部会「器械運動マット運動」、中学校部会「ボール運動ネット型攻守一体プレイタイプ」の授業づくりについて、ゴールイメージを中心とした「教材づくり」「授業設計」「教授行為」からアプローチを行った。この研究のまとめでは、その3点並びに、研究テーマにおける「自ら運動の楽しみ方を創り出していく姿」の各種目における具体について、小学校部会・中学校部会それぞれの研究のまとめから成果と課題について考察を述べていくこととする。なお、3点の成果と課題については、互いに関係し合っている部分もあるため、他の要素に関連した内容を書かなければならない点もあるが、より関係している要素に記載することをご容赦いただきたい。

(1) 教材づくりについて

小学校部会では、器械運動マット運動「組み合わせ技」、中学校部会ではネット型バドミントン「ハーフコートシングルス」をメインの教材として、中心なおもしろさを焦点化、学習内容の明確化、アンケート等を用いた児童生徒の実態を踏まえた上で教材化がなされていた。

小学校部会については、子どもたちの意識を大切にしながらも、子どもたちが新たな技・動きの習得に向けて意図的・協働的な追究を行うことも視野に入れられるよう、特に「どの程度（提示する）技を絞り込むか」ということを部会で話題にしてきた。子どもたちのマット運動についての既習や経験、習熟度によって、取り組みたい技は多様になってしまう。本時、単元後半にも関わらず、提示されていた3つの技の外的な理解が十分でないために、子どもたち自身の協働的な追究が不十分だった様子が見られている。授業設計や教授行為に関する解決方法も考えられるが、子どもたちの意識も大切にすることを念頭に置いた上で、さらなる技の絞り込みについても視野に入れて良かったのではないかと考える。一方で、本単元で使用した学習カードについては、子どもたちの活発な追究を促す手立てとなり得ていた。子どもたちも追究が滞ると、この学習カードに立ち返ることで自身に適した課題や練習方法を見いだすことができる点において、効果的であったと考える。さらに子どもたちの外的な動きの理解が深まっていると、子どもたち自身で意図的にカードを活用することができるようになったのではないかと考えると、マット運動の教材化については、マット運動における中心なおもしろさや学習内容をどの程度まで絞り込むかということと、提示する技の数をセットで考えていきたいと考える。例えば本単元における学習内容「勢いをこらさない回転」ということであったため、この学習内容が強調される技に絞り込むといったことである。これは、私たちが従来のマット運動における授業観（例えば復習の技が提示されている学習カードを用いて子どもたちの個々の意識や課題に委ねた学習）からの脱却も必要となってくるだろう。

中学校部会では「前後の揺さぶり」を学習内容に据えた「ハーフコートシングルス」をメイン教材とした。中学2年生で初めてバドミントンの学習に取り組むため、既存のルールに縛られずに、子どもたちの実態に応じて教材がなされたのは良い手立てであったと考える。また、「前後の揺さぶり」に対して肝

となる「ハイクリア」の技能習得に向けて、さまざまな動きづくりの練習を、単元を通じて取り組んだことも、子どもたちが、メイン教材に対するポイントを掴む上でも効果的であったと考える。学習内容とメイン教材、ドリル練習が一貫した教材づくりとなっていた。

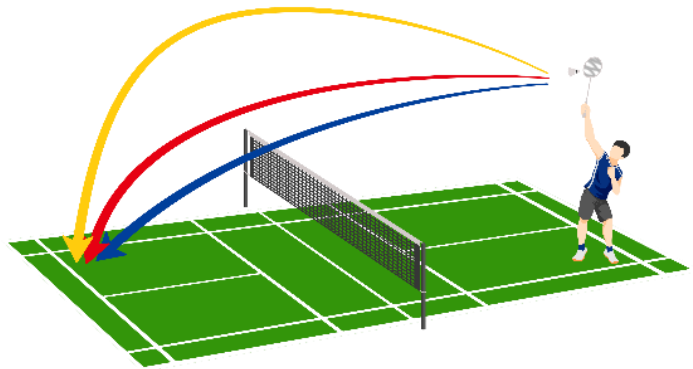
(2) 授業設計について

小学校部会・中学校部会にともに、ゴールイメージに向けて、予想される子どもたちの動きを根拠とした授業設計を行なった。一方で特に単元後半におけるゴールイメージに向けた子どもたちの「運動の楽しみ方を創り出していく姿」をイメージした単元前半の授業設計がなされていたかという点が課題となってくるだろう。

小学校部会では、単元後半では、単元前半で扱った技の外的理解や学び方をもとに、子どもたち自身で課題や練習方法を明確にした主体的な追究を期待していたが、本時の様子からも、なかなか自身から課題を見出したり、友だちの技を見て自身の知識をもとに対話したりする姿が見られなかった。本単元における課題の仕分ける際に、外的な動きの理解は「教師が教えて良いもの」として扱った。単元前半の3つの技を1時間ごとに扱った際に、示範の映像を交えながら、子どもたちに理解を促すことが大切であったといえる。「外的な動きのイメージは分かっているのにできない」といった、イメージと実際の動きとのズレが原動力となり単元後半の主体的な追究につながっていったのではないかと考える。単元前半で知識をどう掴ませるかということについてより深い授業設計が必要であったといえる。

中学校部会では、子どもたちが「前後に揺さぶる」ことをイメージしながら学習を進めていたが、実際に「揺さぶっている」「揺さぶられている」といったイメージをもっていたか、またそのための「シャトルの軌道のイメージをどの程度もって授業を進めていたかということが課題として挙げられるだろう。

右図は相手をコート奥に動かすための「クリア」のショットであるが、そのショットの軌道についても3種類あることが分かる。本単元ではこの内の低い軌道か真ん中の軌道で奥を狙う姿が多かったのではないかと考える。この2つの軌道は、相手の左右を抜かなければ奥にシャトルを運ぶことができない。本メイン教材である「ハーフコートシングルス」で



は、左右に抜くことが難しいため、結果として相手は真ん中のコート位置でも返球することが可能になっていたのではないだろうか。単元前半では、ネットを2mに上げてドライブの応酬にならないようなゲームをしていただけに、もう一步踏み込んで、一番上の軌道によって相手をしっかりとコート奥に動かしてから前にチョンと落として相手を動かすといった、真に「揺さぶっている・揺さぶられている」といったゲームイメージに向かった授業設計が必要であったといえる。

(3) 教授行為について

教授行為については、特に単元のオリエンテーション時に、教師が映像資料を交えながら、どのような発問等の教授行為を行うことで、子どもたちとゴールイメージを共有し、単元の見通しをもてるようにしていくか考えた。また、今年度はふり返りにおける学習カードの効果的な活用についても視野に入れ

て研究を進めた。

小学校部会では、授業校の宮田小学校が前年度までに創り上げた学習カードを生かして、子どもたちが主体的に学習に取り組んでいく姿を構想した。学習カードによって、技のポイントや出来映えが見えること、また自身の段階に応じた練習方法を選ぶことができる学習カードは、体育を専門としない先生方にとっても、使いやすいカードであることを実感した。本時の授業記録から、教師の的確なアドバイスが求められる部分があった通り、学習カードの動きのポイントを子どもと教師で共有し、そこに関わるフィードバックを教師が意図的に増やしていくことで、さらに子どもたち同士の活発な追究が可能になったのではないかと考える。また、今後宮田小学校ではこの学習カードを軸に高学年でのマットの学習を行っていくことで、子どもたち自身がカードを使いこなしながら、マット運動を含めた器械運動の学び方として「新たな技（動き）の外的なポイントを掴む→自身の出来映えとのズレを認識する→ズレを解消するための課題や練習方法を考え実践する」といった学習過程を自分のものにしていく姿も期待できるだろう。この学習過程を子どもたち自身で創り出していく姿こそ、後述する「運動の楽しみ方を創り出していく姿」にもつながっていくのではないかと考える。この優れた財産をぜひ上伊那全体に広げたい。

中学校部会では、今回ゲームをふり返るツールとして、ICTの動画によってふり返る方法を選択したが、効果的なふり返りが見られなかったとの記録があったように、「前後の揺さぶり」をフィードバックするための学習資料にはならなかった。昨年度のバスケットボールタイプの際にも話題にしたが、本単元におけるメイン教材は、ネット型攻守一体タイプといった特性も相まって、子どもたち自身でゲームのふり返りができるシンプルなルールであったと考える。また、コートを前・中・後に分割されていることで、客観的にふり返るツールがあれば、自分の戦術も見えやすかったのではないだろうか。ボール運動においては、学習内容に直結する自分（たちのチーム）のゲームをふり返るためのゲーム記録の研究をさらに進めていきたいと考える。また、単元のオリエンテーションで使用したゴールイメージに迫る映像視聴は、メインゲームの映像でなかったことも悔やまれる。夏期合宿ができなかったことや時間的な都合があり仕方ない部分もあったかと思うが、メインゲームの示範映像であれば、前述したシャトルの軌道や揺さぶりのイメージも明確になっていたのではないかと考える。

ICTの活用については、中学校部会でも触れていたが、小中学校共に「自分たちの動画を撮って見る」といった使用方法に留まっていた。「見る視点や撮る視点を明確にする」といった方法を確立していくことはもちろん、岩田先生の講演でもあった「ゲーム分析のスプレッドシート」など、今後は動画撮影のみに留まらない活用方法についても模索していきたい。

（４）「自ら運動の楽しみ方を創り出していく」具体的な姿について

小中学校それぞれの実践から子どもたちの「自ら運動の楽しみ方を創り出していく」具体的な姿について、授業記録や授業分析、授業研究会の発言等から明らかにしていく。

①小学校部会から

- ・自分で選んだ場で技の上達を目指して熱心に何回も何回も練習する姿
- ・授業時間中、終始休まず練習したり動きを確認したり追究し続けたりする姿
- ・ペアやグループの友だちと顔を見合わせて動画を確認したりめあてを確認し合ったりする姿
- ・外的なポイントを踏まえた上で練習方法を確認し、ペアに動きを確認してもらいながら試行錯誤す

る姿

- ・自己の課題に対して、練習方法を選択・工夫をし、技の上達を目指している姿
- ・新たな技の習得のために 外的なポイントを踏まえた上で、自身の課題を明確にもち、練習方法や自身の動きの感じを変えながら試行錯誤する姿

②中学校部会から

- ・ピンクチームの様子から試合を見ているチームメイトから「今だ！3番！」と声をかけるなど、コート外から仲間に貢献しようとする姿
- ・青チームの様子からハイクリアで相手を後方に下げた後に意図的にドロップを打つ場面が見られた。ドロップが決まることは少なかったものの、見事に決まると大きな盛り上がりを見せた姿
- ・個人で行う運動ではあるが、自分がプレイするだけでなく、ゲーム中にアドバイスをして仲間の力になっている場面や、ゴールイメージにもある前後の揺さぶりの特にドロップを決めた時の歓声

小学校部会「マット運動」では、特に学習過程にクローズアップされていることが印象的である。これは、マット運動が、複数の技を単元で扱い、一つ一つの技の構造の違いによって、ボール運動のような、運動に関する知識・技能のみに絞らざるを得ないということも影響しているだろう。今後、子どもたちの実態や発達段階によっては、より学習内容を焦点化したマット運動の授業づくりの方向性も考えられる。その一方で「新たな動き（技）を発生させる」といったマット運動に留まらない運動の楽しみ方を創り出していく姿としての見方もできる。その見方から考えると、マット運動について「外的なポイントを理解した上で、自分の課題や練習方法を明確にもち試行錯誤する姿」が楽しみ方を創り出している姿といえるのではないだろうか。また、「試行錯誤」の具体的な姿として、「外的なポイントと自身の出来映えや感覚のズレを修正していくこと」ということも付け加えたい。この学習過程は、バドミントンにおけるハイクリアの技能習得過程にも生かすことができる「新たな動きの習得過程」で大切にしたい楽しみ方につながると考える。

中学校部会「ネット型攻守一体タイプ」では、盛り上がりや歓声といった部分に焦点が当たっているが、その内容はやはりゴールイメージにも関わっている「揺さぶり」がキーワードとなってくるだろう。さらに付け加えると、本時の学習については、クリアやドロップのシャトルの軌道や、真に揺さぶって攻撃するといったイメージを子どもたちに掴み切れていなかった点もあるが、ピンクチームや青チームの子の様子からも「相手を意図的に揺さぶる」ことに向けた追究がより運動の中心的な面白さにつながっていくと考えられる。意図的に揺さぶるために、シャトルを打ち分けるショットの技能を習得し、習得したショットを相手の動きや思考の駆け引きによって意思決定していく攻防を発達段階や実態に合わせた教材化によって実現していきたい。

(5) 研究のまとめ

本年度の研究では、マット運動、ネット型攻守一体プレイタイプと小中部会で扱った領域は違うものの、授業づくりを通して、研究テーマ「すべての子どもが、運動の中心のおもしろさを十分に味わいながら、自ら運動の楽しみ方を創り出していく体育授業」に向けて実践を積み重ねた。成果と課題のまとめについては以下の表として示す。

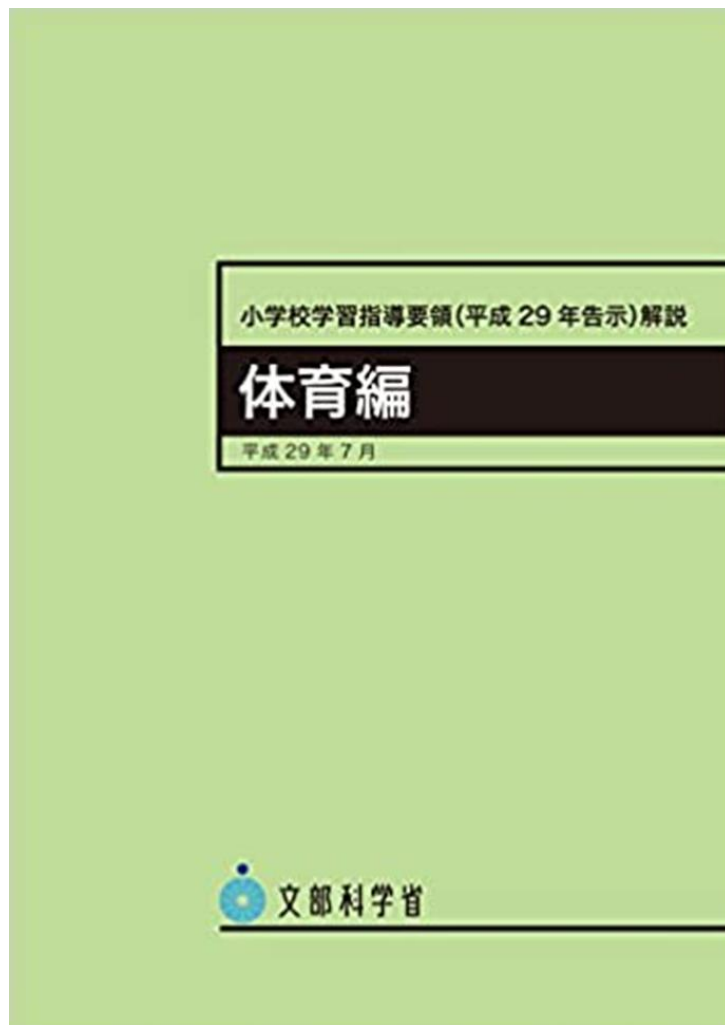
小学校部会（マット運動）

中学校部会（ネット型・攻守一体プレイタイプ）

成果	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの活発な追究や、運動の楽しみ方創り出していく姿につながる学習カードの活用 	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容とメイン教材、ドリル練習が明確かつ一貫されていた教材づくり
課題	<ul style="list-style-type: none"> 単元後半におけるゴールイメージに向けた子どもたちの「運動の楽しみ方を創り出していく姿」をイメージした単元前半の授業設計 動画撮影・視聴のみに留まらないICTの活用方法。ゲーム記録の検討。 	
創り出していき姿	<ul style="list-style-type: none"> 外的なポイントを理解した上で、自分の課題や練習方法を明確にもち試行錯誤する姿 	<ul style="list-style-type: none"> 「相手を意図的に揺さぶる」ことに向けて追究する姿

本研究で見出した成果や「自ら運動の楽しみ方を創り出している姿」、ならびに学習カードやゴールイメージ映像については、本研究会で積み重ねていくと共に、上伊那体育の日々の授業が向上されるよう、多くの学校や先生方へ広めていきたい。そして実践していく中で見られた子どもたちの姿から、さらに研究を深めていきたい。

新学習指導要領の完全実施3年目



小学校学習指導要領(平成29年告示)解説

体育編

平成29年7月

「全ての児童が、楽しく、安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導等の在り方について改善を図る。その際、特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的ではない児童への指導等の在り方について配慮する」ことが示されました。

学習評価の改善の 基本的な方向性



- ① 児童生徒の**学習改善**につながるものにしていくこと
- ② 教師の**指導改善**につながるものにしていくこと
- ③ これまで慣行として行われてきたことでも、**必要性・妥当性が認められないものは見直して**いくこと



ある児童において，単元
の前半に評価の機会を設
定した項目が

Bまたは C であったもの
を，単元の終盤までに
A または B となるよう
指導の充実を図ることが
本来の評価の在り方であ
る。

令和4年度 長野県小学校 体育実技指導者講習会

Aコース 幼児の運動遊び（幼・小）

1 特性や魅力を踏まえた学習指導のあり方

幼児期運動指針（文部科学省，平成24年策定）

- 1) 多様な動きが経験できるように様々な**遊び**を取り入れること
- 2) **楽しく体を動かす**時間を確保すること
- 3) 発達の特性に応じた**遊び**を提供すること



1 特性や魅力を踏まえた学習指導のあり方

遊び = **内発的**に動機づけられた状態

○ **自己決定的**に行動すること
(自分らしく行動すること)

○ **有能さ**を追求すること
(自己の能力を向上させること)

子どもの**主体性**を確保し、

遊びとしての**運動指導**を行うことが**重要**

2 学習指導の工夫

(1) 特性や魅力に迫る活動の例

①遊び要素を高める魅力ある教材の工夫

②多様な動きを引き出す教材の工夫

フープ遊び

フープツイスター



フープ遊び

2人1組で交互にジャンプ



フープ遊び

ボールを組合せた遊び



フープ遊び

ボールを組合せた遊び



2 学習指導の工夫

(2) 運動が苦手な幼児や意欲的でない幼児への
指導の工夫

- ① **できることからはじめ**、できることの質を高めていく
- ② 幼児が**思わずやってみたくなる**ような（動いてみたくなる）ような工夫
- ③ **興味をもったこと**で（興味をもてそうなこと）で**自信をもたせる**
- ④ 直接に活動の関わることのできる機会を設ける

2 学習指導の工夫

(3) ICTを効果的に活用した活動の例

- ①イメージを広げる
- ②自身や他児が行っている運動の姿を振り返る
- ③音楽再生機器として利用する
- ④子どもがダイナミックに身体を動かしている様子を保護者へ伝える

2 学習指導の工夫

(4) 運動の日常化につなげる指導の工夫

- ①園生活の中で身体を動かせるような工夫をする
- ②準備や片付け等を子どもと一緒に行う
- ③日常生活の中での活動量を増やすためのポイントを保護者へ伝える



保育室までのケンパ遊び



「おはようボール」

苦手な児童への意欲面での配慮の例

- 体を動かすことを好まない児童には、教室から友達と手をつないで体育館や運動場に移動するなど、**授業前から友達と関わりながら自然に運動遊びに加わっていくことができるようにする**などの配慮をする。
- 友達と関わり合うことに意欲的になれない児童には、ペアやグループで調子を合わせて動くことによって、**気持ちも弾んでくること**が**実感できる運動遊び**を準備したり、意欲が感じられる児童のつぶやきや動きを取り上げて共感したりするなどの配慮をする。

令和4年度 長野県小学校 体育実技指導者講習会

Bコース 陸上運動系（小学校）

I 特性や魅力を踏まえた学習指導のあり方

新学習指導要領（陸上運動の領域構成）

低学年	中学年	高学年
走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動
走の運動遊び	かけっこ・リレー	短距離走・リレー
	小型ハードル走	ハードル走
跳の運動遊び	幅跳び	走り幅跳び
	高跳び	走り高跳び

（内容の取扱い）児童の実態に応じて、「投の運動（遊び）」を加えて指導することができる。

→遠くにカー杯投げることに指導の主眼を置き、投の粗形態の獲得とそれを用いた遠投能力の向上を図ることが主な指導内容となる。

1 特性や魅力を踏まえた学習指導のあり方

『陸上運動』

走ること

組み合わせる

跳ぶこと

大きく

合理的な身体操作を身につける。



記録の達成や向上につながる。



運動の楽しさや面白さにつながる。

素早く

力強く

1 特性や魅力を踏まえた学習指導のあり方

○新学習指導要領改定のポイント

<知識・技能>（中学年・高学年）

ヒント：「かけっこ・リレー」「短距離走・リレー」

→ （滑らかな）バトンの受渡しをする。

○指導計画と内容の取扱い

- ・ 児童の実態に照らした適切な活動や場づくり
- ・ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり及び授業改善→ICT機器の活用（あくまで手段の一つ）

1 特性や魅力を踏まえた学習指導のあり方

(滑らかな)

バトンの受渡し

- ・ 児童の実態に照らした適切な活動や場づくり
- ・ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善→ICT機器の活用

中学年『走の運動（かけっこ・リレー）』（講師テーマ）

運動が苦手な児童や意欲的でない児童も

楽しみながら動きが身につけられるような活動や場づくり

～ICT機器を活用しながら～

2 学習指導の工夫

(1) 運動の特性や魅力に迫る活動の例

○準備運動、主運動につながる運動

<運動の例>

- ・大また走
- ・スキップ走
- ・ねことねずみ
- ・段ボールハードル走
- ・しっぽ走
- ・変形ダッシュ走
- ・ケンパー跳び
- ・硬さや軽さの異なるボール投げ
- など

2 学習指導の工夫

(2) 運動が苦手な児童や意欲的でない児童への指導の工夫(中学年『かけっこ・リレー』)

- 楽しみながら動きが身につくように運動の場を工夫
(例) ペットボトルタッチ競争
- 楽しさが増すように活動の仕方を工夫
(例) 競走(争)する楽しさ・・・スタートの位置や姿勢を変えた
かけっこ
- 自己の課題がもてるようになる動きのポイントをおさえる
(例) 「まっすぐ前を見る」 「前後に腕を大きく振る」
「軽く前傾する」

2 学習指導の工夫

(3) ICTを効果的に活用した活動の例

- ①見本となる動きとそのポイントを理解する
見本視聴・ポイント共有→児童同士の教え合い
- ②自分の動きを確認・分析する
動画等を一時停止して画面に補助線を引く
- ③事前・事後の動きを比較する
学習前と現在を並べて（重ねて）再生

2 学習指導の工夫



2 学習指導の工夫

(4) 運動の日常化につなげる指導の工夫

- 走の運動 (遊び)
- 跳の運動 (遊び)
- 投の運動 (遊び)

令和4年度 長野県小学校 体育実技指導者講習会

Cコース 水泳運動系（小学校）

1 特性や魅力を踏まえた学習指導のあり方

☆水泳の特性や魅力

- ①冷たさや浮力などの心地よさ
- ②できなかったことができる楽しさ
- ③記録（距離・速さ）を求める楽しさ
- ④仲間と競い合う楽しさ など



☆水泳はバランスのよい全身運動

- ①身体の柔軟性を高める
- ②呼吸循環器系の機能向上
- ③バランス能力を養う



→健康・体力作りや各種スポーツの補強運動、リハビリテーションなどに利用されている。

2 学習指導の工夫

(1) 運動の特性や魅力に迫る活動の例

①準備運動、主運動につながる運動

低中学年・・・大きな動作でリズムカルに体を動かす

高学年・・・水中でリラックスできるように全身を大きく動かす
泳ぎや呼吸のイメージをもたせる

☆シャワー

頭から十分に水をかけること、遊び感覚で大きな声で数を数える、歌を歌うなど

☆水慣れ

プールサイドで腰掛けキック、心臓の遠い方から水をかける、入水はゆっくり、後ろを向いて

②水の特性を味わう運動

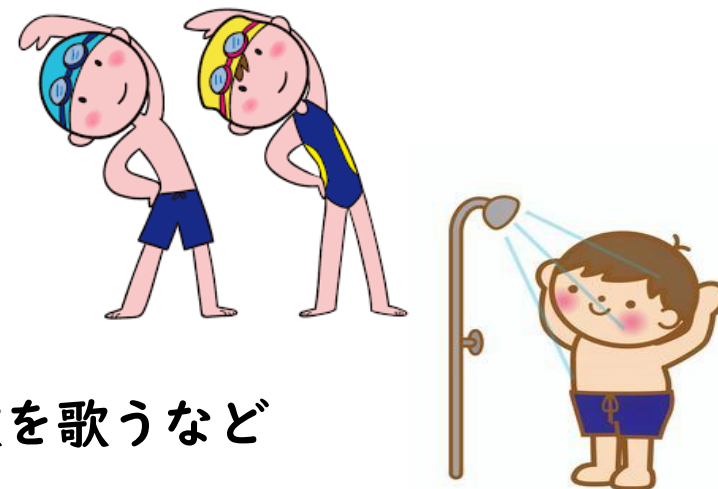
水の抵抗や浮力を感じる遊び・・・かけっこ、鬼遊び、ボール遊びなど

③水の特性を利用する、克服する運動

→抵抗を避ける姿勢、水平な姿勢を大切にしながら学習を進める。

④安全面の配慮

→健康状態の把握、適切な水深、児童全員を視野に入れて指導



2 学習指導の工夫

(2) 運動が苦手な児童や意欲的でない児童への指導の工夫

①水に対する恐怖心を和らげる（取り除く）活動

- ・安定した呼吸の獲得→かべや補助具を使ってもぐる、浮く
バブリング、ボビング
- ・より細やかなスモールステップ→適切な水位、補助具、仲間との活動

②児童がより具体的に運動（技能）を理解するための助言の工夫

- ・技能のポイントを繰り返し助言→分かりやすく、一項目ずつ取り上げる
- ・動きのイメージを持ちやすい言葉→オノマトペ

③児童自身が上達を実感するための活動の工夫

- ・意欲が高まる楽しい活動・仲間との触れ合い・技能の伸びを実感

低学年の例（文部科学省） YouTube

<https://www.youtube.com/watch?v=l1ci363atpA>

高学年の例（文部科学省） YouTube

- <https://www.youtube.com/watch?v=S6kwnMYGGhl>

(実技) 3年生 「浮いて進む運動・もぐる運動」

- 水の抵抗や浮力を感じる遊び

 - 水中鬼ごっこ、水中じゃんけん、いろいろな物で浮いてみよう

- いろいろな潜り方を使用

 - プールの底にタッチ、プールの底にお尻でタッチ、またくぐり、
変身もぐり

- いろいろな浮き方

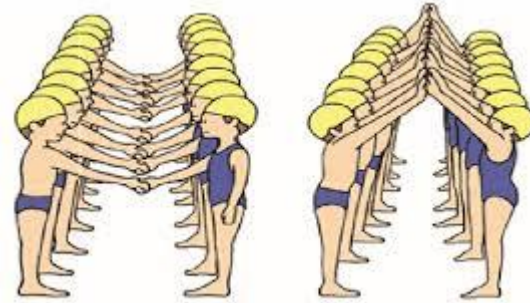
 - 補助具を使う、

 - 変身浮き（伏し浮き→大の字浮き）（だるま浮き→クラゲ浮き）

2 学習指導の工夫

(3) ICTを効果的に活用した活動の例

- ①自分の泳ぎを映像で確認する
→バディ、トリオシステム



- ②理想的な泳ぎを見たり、比較したりする
→NHK「体育の介」、YouTubeなど
(講師の意見)



体育の介～クロールに挑戦だ！～

https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005220013_00000

(講師の意見)

2 学習指導の工夫

(4) 運動の日常化につなげる指導の工夫

① 児童が水泳を好きになるためには

→ 特性や魅力を味合わう活動、恐怖心を取り除く活動など、丁寧に繰り返し指導

② 水泳嫌いをつくらないための配慮とは

→ グルーピングの配慮、指定水着への配慮、心理的ケア、環境、児童の実態などきめ細やかな対応

③ 授業前後の学習の促進について

→ ICT機器の活用

